

未来を切り開く子どもをめざして

～「しまね学力向上プロジェクト」実践事例集～



平成19年2月
島根県教育委員会

はじめに

～ふるさとを愛し、未来を切り開く子どもを育む～



社会の大きな変化の中にあっては、子どもたち自身が、社会や人とのかかわりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力、様々な問題に対応してこれを解決することのできる力を身に付けることが大切です。そのためには、教科等の基礎的・基本的な学習内容が確実に定着していることや、豊かな人間性、健康や体力が育まれ、知徳体がバランスよく発達していることが必要です。

このようなことから、「しまね教育ビジョン21」（平成16年3月26日島根県教育委員会策定）においては、「知徳体の調和的発達をもとに、社会や人とのかかわりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力や問題解決能力を身に付けること」を島根のめざす教育として掲げています。

島根県教育委員会では、本年度「しまね学力向上プロジェクト」として、各種の学力向上対策事業をスタートさせ、小学校・中学校・高等学校・特殊教育諸学校が一体となった学力向上をめざして取り組んでまいりました。昨年5月には「島根県学力調査」を実施し、その調査結果については、10月に報告書にまとめ、各小・中学校及び関係機関に配付いたしました。また、学力調査結果説明会やリーダーセミナー、管理職研修等を通して、各学校で学力向上を協働して推進するための方策について具体的に示してまいりました。各学校では、実態に応じ、授業改善を図るなど学力向上に向けて取り組んでいただいているところです。

本事例集は、これまでの県の学力向上の概要や各種指定校を中心とした学力向上の取組の事例をまとめ編集したものです。

各学校におかれましては、児童・生徒一人一人に「確かな学力」を身に付けさせるために、本書を積極的に活用し、わかる授業の実現や望ましい生活・学習習慣等の育成、授業改善に、より一層努めていただきたいと願っております。

終わりに当たり、本書の作成にご尽力いただきました先生方をはじめ、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。



平成19年2月

島根県教育庁教育監

三浦正樹

◇◇ 目 次 ◇◇



◆ はじめに

◆ 「しまね学力向上プロジェクト」の概要等

1 島根がめざす教育	2
2 島根がめざす『確かな学力』	4
3 平成18年度「しまね学力向上プロジェクト」の概要	5
4 学力調査結果を活用した「確かな学力」の向上を図るための島根県の施策	6
5 「確かな学力」を総合的に育成するための視点（小・中学校）	7
6 学力調査結果に基づく各教科の学習指導の工夫・改善	8

◆ 学力向上を協働して推進するための取組例

1 ビジョンを共有するために	12
2 自校の課題の明確化と取組の重点化を図るために（学力調査結果説明会より）	15
3 自校の課題を解決するための手だての明確化のために（教頭研修より）	18
4 授業評価等を通して教育課程改善を図るために（リーダーセミナーより）	20

◆ 平成18年度 学力向上フォーラム発表校実践事例

1 出雲市立大津小学校	24
2 江津市立青陵中学校	26
3 江津市立跡市小学校	28
4 安来市教育委員会，安来市立広瀬小学校	30
5 海士町立福井小学校	32
6 安来市立赤江小学校	34
7 益田市立匹見小学校	36
8 松江市立大谷小学校	38
9 奥出雲町立横田小学校	40
10 飯南町立赤来中学校	42
11 隠岐の島町立西郷中学校	44
12 奥出雲町立横田中学校	46
13 益田市立益田東中学校	48

＊ ＊ 表紙 ＊ ＊

「初夢で見た未来の学校」

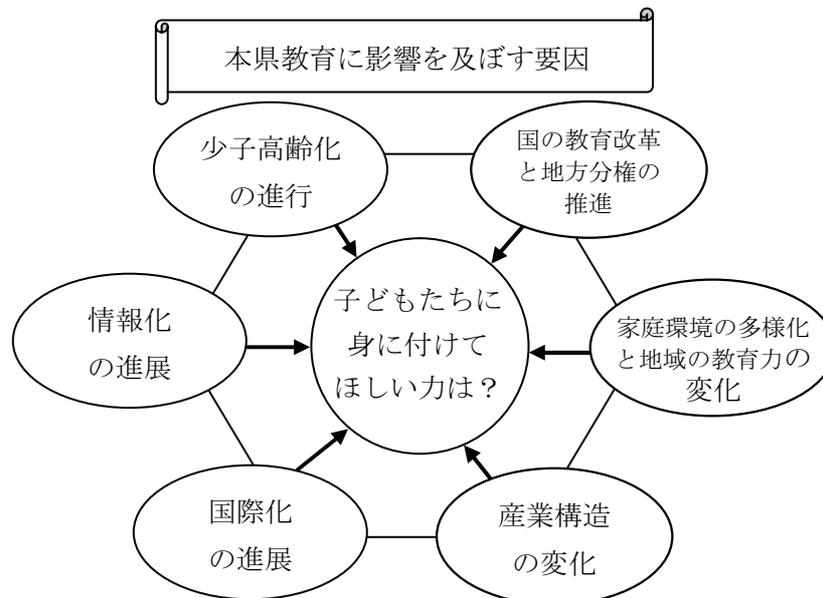
制作 出雲教育事務所 指導主事 山岡 晴夫

「しまね学力向上プロジェクト」の 概 要 等

1 島根がめざす教育（「しまね教育ビジョン21」より）

（1）教育環境の変化と本県教育の課題

「しまね教育ビジョン21」では、「今後10年間を見通した本県教育の在り方」を検討する際の前提となる「今後10年間の社会」を、下記の6つの要因がますます進行していく社会と仮定しました。それらの要因が本県の教育に及ぼす影響から、変化する社会の中で、子どもたちにどのような資質や能力を身に付けさせていくのか、そのためには、どのような施策を展開し対応するのか検討し提言しています。



（2）「島根がめざす教育」

①子どもたちに身に付けて欲しい力

社会の大きな変化の中にあっては、子どもたち自身が、社会や人とのかかわりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力、様々な問題に対応してこれを解決することのできる力を身に付けることが大切であり、島根では次のような資質や能力を育てることをめざしています。

「知・徳・体の調和的発達をもとに、社会や人との関わりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力や問題解決能力を身に付けること」

②「教育の基本理念」

生きる喜び、学ぶ楽しさを通して、一人一人の可能性を開花させ、社会の一員として自立して生きていくことができる子どもを学校、家庭、地域社会が連携して育む。

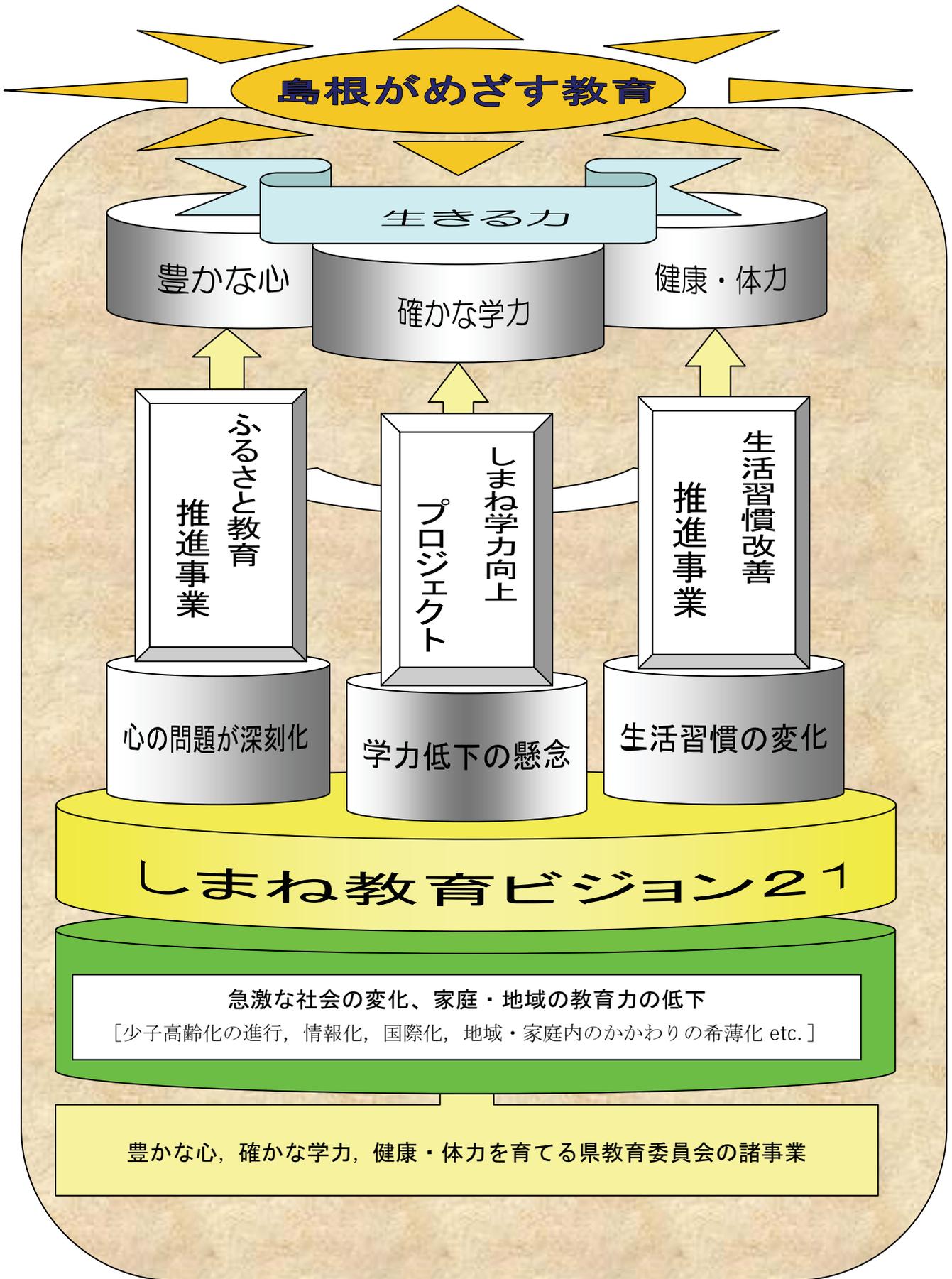
③「基本理念を実現するための6つの施策の一つ」

～夢を描き、その実現に向かっていく教育の推進～

変化する社会の中で自分らしい生き方を実現していくためには、まず教科等の基礎基本の確実な定着を図るとともに、自ら学び、自ら考える力などの育成を通じて**確かな学力**を身に付けることが大切です。

そのために、学校教育や教育行政が進める学力向上の取組として、次のような点が掲げられています。

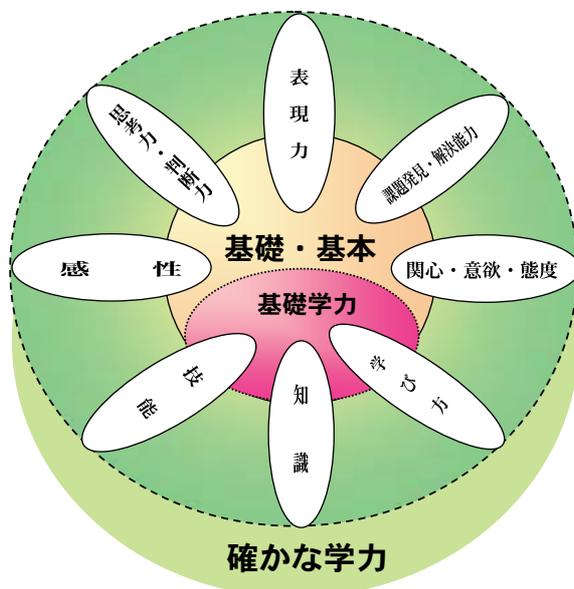
- ア 一人ひとりに応じた学習指導など授業づくりの工夫と家庭と連携した学習習慣づくり
- イ 教職員の指導力の向上と研修の充実、授業の質の向上等に重点を置いた校内研修体制の充実
- ウ 学校体制づくりのための管理職の学校経営力の向上と教職員の一層の協力体制づくり
- エ 将来の夢を育む教育、職場体験などを通じた職業観、勤労観の育成



2 島根がめざす「確かな学力」

(1) 「確かな学力」「基礎・基本」「基礎学力」の3層構造と8つの要素

「確かな学力」の育成は、学校が担う重要な役割であり、目標を明確にして、取り組んでいく必要があります。そこで、島根県がめざす「確かな学力」とは、3つの層と8つの要素からなる、次の図であらわされる力であるととらえました。



確かな学力	自ら学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力。上記の8つの学力の要素から成る。
基礎・基本	学習指導要領に示される目標・内容等3～5つの観点で評価される資質や能力
基礎学力	基礎・基本のうち、知識、技能、学び方の観点から、学習の基盤として身に付けておく資質や能力。読む、書く、話す、聞く、計算する力や、これらの力を身に付けるための学習の仕方など。

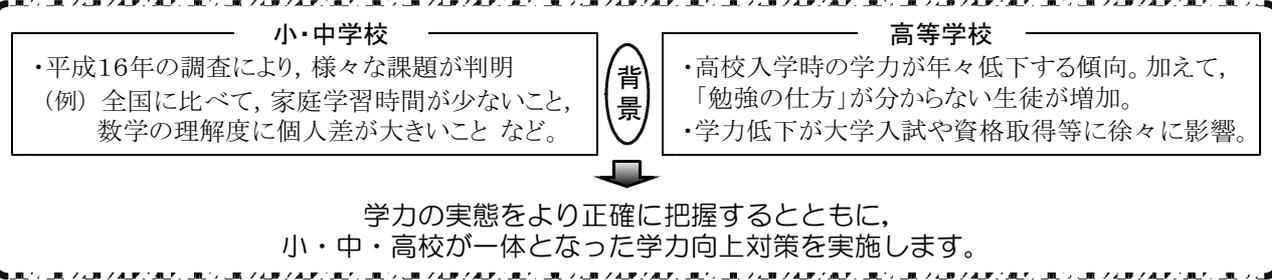
(2) 「確かな学力」育成の重点化 ～中期的・長期的な時間の見通しをもって「確かな学力」を育む～

3層からなる「確かな学力」を、学校全体で育成していくためには、まず、必修教科、選択教科、総合的な学習の時間などの教育課程等と関連させて、学校教育目標の中で指導の重点化を図っていくことが必要となります。その際には以下の視点から重点化を図っていくことが大切であると考えられます。

- ① 児童生徒や地域の実態から、どのような力を、まず重点的に育てていくべきか、次の段階での重点は？など、児童・生徒の学力を向上させていく中期的・長期的な時間の見通しをもつ。
- ② 研究テーマなどから学校で育てる力を重点化している場合、3層の学力等との関連を明確にしておく。
- ③ 個々の教職員の経験や指導力、また年齢構成等から、教職員集団として、3層の学力等のうち、どのような力を育てるか指導力を充実、向上させるべきか、次の段階での重点は？など、教職員の指導力を高めていく、中期的・長期的な時間の見通しをもつ。

3 平成18年度「しまね学力向上プロジェクト」の概要

児童・生徒の学力向上に向け、平成18年4月から、全県的なプロジェクトをスタートしています。



★ 事業の内容 ★

(1) 学力の把握・分析と周知・啓発

○小・中学校 ●高校 ◎小・中・高校共通

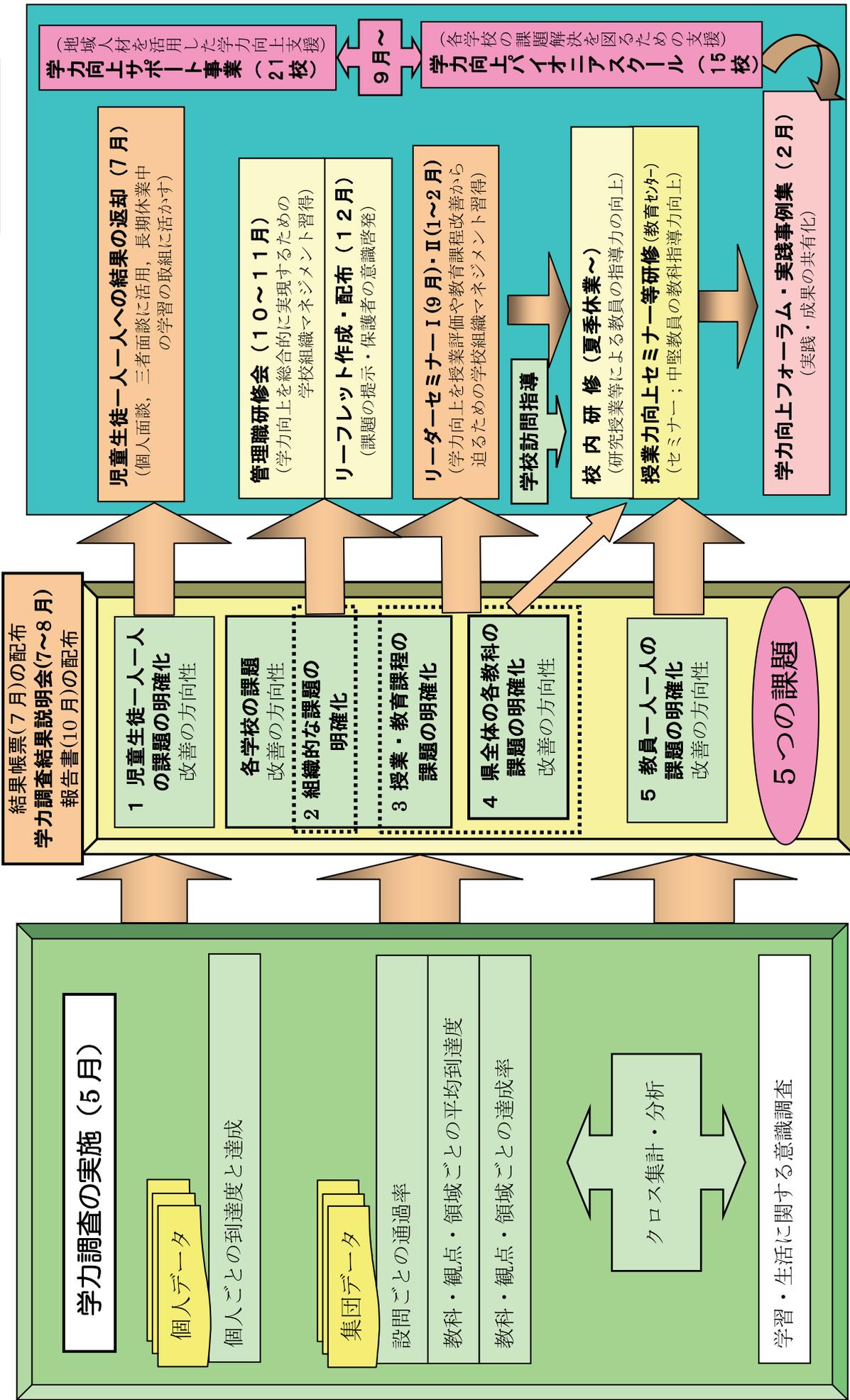
	小学校	→	中学校	→	高等学校
把握・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>全県学力調査の一斉実施</u>（「島根県学力調査」）【5月】 <ul style="list-style-type: none"> 小3から中3までの、全児童生徒を対象に実施します。 (前回の平成16年1月調査は、小6と中3の20%だけが対象。) 教科の学力に加え、学習習慣や生活状況、意識等も調査します。 民間業者を活用し、全国水準と比較できるデータを入手します。 児童生徒一人ひとりに結果を返し、個別指導に役立てます。 			<ul style="list-style-type: none"> ● <u>学力に関する状況調査</u> <ul style="list-style-type: none"> 文書による調査と、学校訪問による直接調査を行います。 業者による全国模試の情報なども積極的に入手し、分析します。 (※17年度に引き続き実施) 	
周知・啓発	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>学力調査結果説明会</u>【7～8月】 <ul style="list-style-type: none"> 県内5地域(松江・出雲・浜田・益田・隠岐)で開催します。 地域内の高校も参加し、小・中・高校の連携を図ります。 ○ <u>調査結果についてのリーフレット作成</u>【12月】 <ul style="list-style-type: none"> 小・中学生の全保護者と、全小・中・高校に配布します。 			<ul style="list-style-type: none"> ● <u>学力向上対策リスト</u> <ul style="list-style-type: none"> 各高校の特色ある学力向上対策をリスト化し、全高校へ提供します。 (※17年度に引き続き実施) さらに、小・中学校にも配布します。 	



	小学校	→	中学校	→	高等学校
(2) 学校パワーアップ事業 指導システムの改善・強化	(成果の共有化)		<ul style="list-style-type: none"> ● <u>学力向上フォーラム</u>〔小・中フォーラム(2月)／高校フォーラム(8月)相互参加〕 <ul style="list-style-type: none"> 学力向上に成果をあげている県内各学校の優れた実践を発表するフォーラムです。 さらに、県外からも講師を招き先進的な取り組みを学びます。 ○ <u>「実践事例集」の発刊</u> <ul style="list-style-type: none"> 成果のあがった実践例などを冊子にまとめ、すべての小・中学校と高校へ配付します。 ● <u>学力向上対策リスト</u>(上記) <ul style="list-style-type: none"> 各高校の持っている優れたノウハウを、全高校で共有します。 		
	○ <u>学力向上サポート事業</u> (地域人材の活用…小・中学校21校)				
	<ul style="list-style-type: none"> ● <u>学力向上パイオニアスクール</u>〔小・中学校15校、高校3校〕 <ul style="list-style-type: none"> 学力向上に取り組むモデル的・先進の実践校として指定します。 ◎ <u>リーダーセミナー</u> <ul style="list-style-type: none"> 指導的、中核的立場にある教員を対象としたセミナーです。 学力向上に有効なシステムや指導法について研究し、各学校での実践を図ります。 				
◎ <u>授業力向上セミナー</u> 〔中学・高校〕 <ul style="list-style-type: none"> 教科指導力向上のための実践的な研修です。経験12～20年の全教員を対象に、3年間かけて行う予定です。 					
● <u>予備校研修プログラムへの教員派遣</u> 〔高校〕					
(3) 教員パワーアップ事業 指導力向上・授業改善					

4 学力調査結果を活用した「確かな学力」の向上を図るための島根県の施策（小・中学校）

島根県教育委員会



5 「確かな学力」を総合的に育成するための視点（小・中学校）

～分析結果から明らかになった学力を高める5つの窓と改善のキーポイント～

島根県教育委員会

学び合い高め合う集団づくり

学習指導の工夫・改善

☆学校全体で学習指導の工夫・改善を図ります。

- 4 学習への関心や意欲を高めるとともに、わかる授業を工夫する。
- 5 自分の考えを書くなど、考えをまとめる場を設定する。
- 6 身近な生活と関連付けて学習したり、具体的事象を基にした思考から抽象的な思考へ発展したり深めたりする学習を計画的に取り入れる。
- 7 各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。

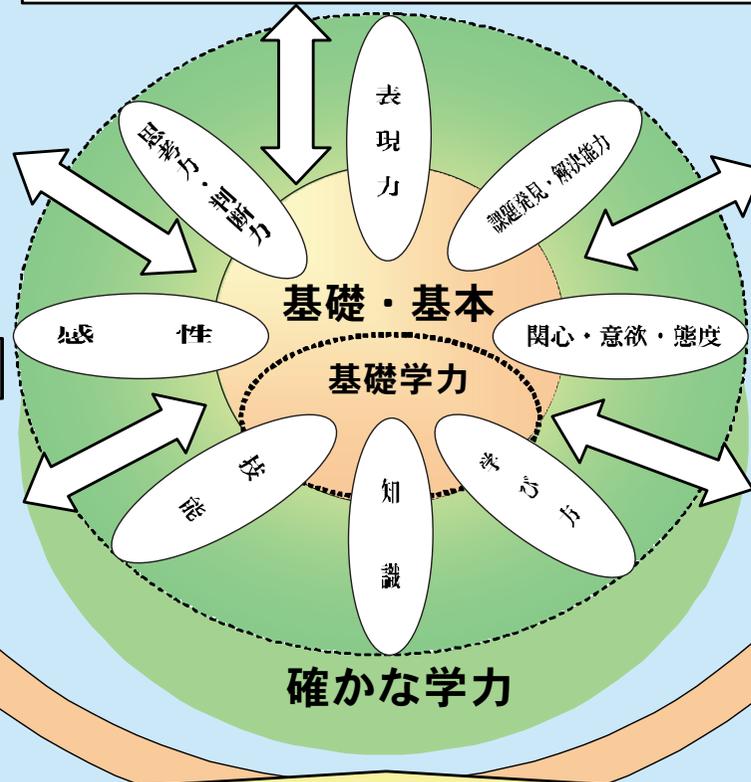
「学習内容を身に付ける力」「学習に取り組む力」の育成

☆学校全体で個に応じた指導を充実し、学び方を身に付けさせたり、学習に粘り強く取り組む力を育んだりします。

- 8 ノートの取り方やまとめ方、復習や予習の仕方など、学習内容を自分自身で身に付けていくための学び方を、学年段階に応じて継続的に指導する。
- 9 学ぶ意味や目的を見付け、自分の目標をやりとげる喜びを重ねていくことができるよう支援する。

☆教師と児童生徒、及び児童生徒相互の信頼関係を高め、共に学び合い高め合う集団づくりに努めます。

- 1 児童生徒の理解を深めるとともに、教師や地域の人、友だちとのかかわりのなかで、自尊心を育てる。
- 2 他とのちがいや一人一人のよさを認め合うなど、学級や学校への所属感をもてる集団づくりに取り組む。
- 3 一人一人がじっくり考えるとともに、友達の見方や考え方から学び、協力して学習する楽しさを味わうことができる学習の改善に取り組む。



「社会の中で生きて働く力」の育成

☆自分の考えをより多くの人にわかりやすく伝えるなど、「問題を解決しようとする力」を育みます。
☆創意工夫する力や、地域や社会とかかわる力などを育みます。

- 10 課題を見付け、それを解決するために考え取り組んできたことを、様々な表現方法で伝える学習や活動に取り組む。（総合的な学習の時間などの各教科等の学習の充実）
- 11 地域や社会に生きる人とかかわりながら、社会への関心を高め、社会に役立つことを実践する喜びや、協力してやり遂げる喜びが見いだせる学習や活動に取り組む。（ふるさと教育・キャリア教育等の充実）

家庭環境と学習習慣づくり

☆家庭での生活習慣や学習習慣の改善を図るとともに、家庭でのふれあいが深まるよう、家庭との連携を深めます。
☆家族とのふれあいと学力との関連性が高いことを保護者に繰り返し伝えます。

- 12 学習習慣が身に付くよう、学年段階に応じた宿題の出し方を工夫する。
- 13 家族とのふれあいが生まれるような家庭学習の課題や長期休業中の課題を工夫する。
- 14 家族の思い出づくりの場や、生活習慣や学習習慣づくりの大切さや意義を、児童生徒と保護者がともに理解する場となるよう、学校行事や授業公開等の諸行事に取り組む。
- 15 読書習慣が身に付くよう、朝読書を推進したり、学校図書館教育を充実したりする。

学校パワーアップ、教員パワーアップなどの学力向上対策事業により、各学校・地域の課題に応じた実践を展開します。また、学力向上フォーラムの開催や実践事例集の配付により、成果のあった学校の実践を共有します。

6 学力調査結果に基づく各教科の学習指導の工夫・改善

教科	学校	指導の重点
国語	小学校	<p>★語彙力を身に付けるような学習を工夫する。 3領域の指導の中で効果的に取り上げること、辞書を積極的に活用すること、言葉に立ち止まったり、吟味したりする活動を多く取り入れること、諺や慣用句を用いた短作文を書く活動を行うことなど。</p> <p>★書く力を身に付けることに重点を置いた学習を展開する。 相手意識や目的意識を重視した書く活動を行うこと、構成メモを活用した書く活動を行うこと、他の2領域の指導の中に書く活動を効果的に位置づけること、書いた後読み返すことの習慣化を図ることなど。</p>
	中学校	<p>★語彙力を身に付けるような学習を工夫する。 3領域の指導の中で効果的に取り上げること、辞書を積極的に活用すること、言葉に立ち止まったり、吟味したりする活動を多く取り入れること、優れた文章を読み味わったり、自分の表現に生かしたりすることなど。</p> <p>★読む力を高めるような学習を工夫する。 構成・文体の工夫などに気づかせるよう、多様な読みの視点を獲得するような読む活動を取り入れること、文脈に即した内容の理解を重視すること、自分のものの見方や考え方を広げるための読む活動を工夫すること、読み取ったことをまとめるための書く活動を取り入れることなど。</p>
算数 数学	小学校	<p>★数量に対する豊かな見方や感覚を育てるために、算数的活動を充実させる。 ・児童一人一人が、様々な具体物の数を数えたり、量を測定したりする活動とともに、その結果を図や表などに表す活動を児童の実態に応じて工夫し、積極的に取り入れる。 ・数を多面的にみる見方に触れたり、身の回りのものの量を調べたり確かめたりする活動を児童の実態に応じて工夫する。</p> <p>★計算の意味などの確かな理解と定着を図るために、考えを表現する活動を充実させる。 ・立式の根拠を児童一人一人が考え、それを図や式、ことばなどで書くとともに、互いに発表し合い、分かり合う活動を工夫する。 ・学習した内容を明確に示し、児童がそれらを繰り返し用いることができるようにする。</p>
	中学校	<p>★数学的活動を積極的に取り入れ、生徒の主体的な学習を重視する。 ・数学的活動をとおして、課題を見つけたり考えたりする場を設定する。 ・自分の考えをことばや図、式を使って表す活動を取り入れる。 ・互いの考えを発表し合う中で、見方や考えのよさに触れる等の活動を取り入れる。</p> <p>★繰り返し学習・継続的な学習を習慣化し、個に応じたきめ細かな指導を充実する。 ・繰り返し学習・継続的な学習によって、基礎的・基本的な事項の定着を図る。 ・論証・記述式問題等についても手順や記述量等、実態に応じてきめ細かく指導する。</p>
社会	小学校	<p>★社会的事象の意味を追求する楽しさを味わわせることのできる指導を工夫する。 人物の願いや事象間の関係などについて自分の考えをまとめたり表現したりする場の設定、お互いの考えを出し合い多様な見方や価値観などに触れる場の設定、身のまわりの社会事象と結びつけて考えていく場の設定、など。</p> <p>★グラフや図、表など資料から必要な情報を読み取る指導を工夫する。 複数の資料から得られた情報を整理し読み取る活動の設定、資料から読み取って分かったことを書く活動の設定、資料から読み取ったことや調べたことを全体で検討し合う活動の設定、など。</p> <p>★学習した内容が確かな知識として定着できるような指導を工夫する。 目標や身に付けてほしい学習内容を明確にするための教材研究、出てきた地名や人名などを地図帳や年表で確認する活動、学習したことを振り返る場の設定、学んだことの記録が残るノートづくりの指導、など。</p>
	中学校	<p>★社会的な思考・判断を高める学習を展開する。 複数の資料から読み取ったことをもとに自分の考えを書いたり、話し合ったりする時間を設ける、社会的な事象について多面的・多角的に考える場を設定する、など。</p> <p>★生徒が自ら学んでいく力を育てるため、学習の仕方を身に付ける指導を工夫する。 ノートのとり方や調べ方、復習の仕方などの学習の仕方、基礎的な知識・技能を定着させるための家庭学習の仕方などの指導を充実する。学んだことを書いてまとめたり、自分の考えを記述したりするなどの学習を取り入れる、など。</p> <p>★世界や日本の地域構成をイメージ豊かにとらえる学習、歴史の大きな流れをとらえる学習を展開する。 地球儀や地図を活用し、具体的な地域の枠組みをとらえる学習、グラフや絵画資料、史料を活用した時代の特徴をとらえ、関連づける学習、など。</p>

理科	小学校	<p>★科学的な思考力を身に付けることに重点を置いた指導を充実する。 観察、実験のまとめを行ったり、考察したりする際、児童が自分の考えを書いてまとめたり、自分の言葉で発表したりする時間を十分にとって、児童自身の言葉や発表を大切に授業を展開するなど。</p> <p>★見通しをもった観察や実験となるよう指導を工夫する。 観察や実験にかかる時間を確保し、結果を予想するなど、児童が見通しをもって観察・実験を行うように工夫していくとともに、実験器具の操作の習熟を図ったり、一つ一つの操作の意味などを十分に理解させたりするような指導過程を重視するなど。</p>
	中学校	<p>★科学的な思考力を身に付けることに重点を置いた学習を充実する。 新しい学習内容や観察・実験の結果をまとめる際には、互いに自分の考えを発表しあったり比較検討しあったりする学習場面を設定したり、ノートやレポートに生徒自身の考えをまとめたりすることを重視した授業を展開するなど。</p> <p>★視覚的にとらえにくい現象の理解を促す学習を工夫する。 電流や水蒸気、原子・分子や光の進む道筋など、視覚的にとらえにくい学習内容や抽象的概念を必要とする学習内容では、模型や作図、モデル図等の活用と、生徒が理解するまでに必要な時間をかけた授業を展開するなど。</p>
英語	中学校	<p>★日常的、継続的に英問英答を行う。 日常的、継続的に英問英答を行うことをとおして英語の表現に慣れさせ、コミュニケーション活動の中で基本的な文法事項の定着を図るとともに、例えば、スキットづくりなどの「書くこと」を取り入れた授業を展開するなど。</p> <p>★テーマを指定して、つながりのある複数の英文を書かせる指導を行う。 指定されたテーマについて、つながりのある複数の英文を書く活動を取り入れた授業を展開する。その際、例えば、自己紹介やshow and tellのような、「話すこと」と関連させた「書くこと」の指導を行うなど。</p>

**学力向上を協働して
推進するための取組例**

1 ビジョンを共有化するために

1 めざす子ども像を協働で作成する必要性

学校のビジョンは、学校教育目標やめざす子ども像、重点目標として掲げられています。このビジョンを実現するためには、教職員がその具体的な姿を共通理解し、目標に向かって一体となって取り組むことが必要です。そのためには、めざす子ども像を教職員全員で協働して作成することが一つのスタートとなります。

では、めざす子ども像を協働作成することで、学校にとってどのような利点が生まれるのでしょうか。次にその利点のいくつかを挙げてみます。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 教職員が共通理解し、ビジョンを共有できる。(2) 授業や日常生活での具体的な姿としてとらえることができる。(3) めざす子ども像の実現に向けた取組が併せて作成できる。(4) 目標の達成状況を把握するための成果指標（児童生徒の変容）と、達成に向けた取組の状況を把握するための取組指標を定め、学校評価などでの評価計画を立てることができる。（参照「義務教育諸学校における学校評価ガイドライン」文部科学省） |
|--|

勤務した学校規模や年数など教職経験が異なる教職員間の共通理解は、めざす子ども像が授業や日常の生活の姿に具現化され、関連付けられてはじめて可能となります。この具体的な姿が、成果指標や取組指標につながり、めざす子ども像がどの程度実現しているか、評価することが可能となります。

これまで、教務部や研究部などを中心に、めざす子ども像や学年段階で育てる能力等を作成し、教職員に提案し決定することもありました。しかし、この方法では、共通理解が得られているようで、実は個々の教職員の経験やイメージの中でそれぞれ異なる具体的な姿に置き換えられて解釈されていることが多く、実際の取組段階に移行したときに、お互いの考えや実践が異なってくる場合もありました。また、評価の指標も定められていないか、定められていても個々の教職員が抱く具体的な姿とのズレがあるため、共通理解が図れず、他人事や掲げただけで終わってしまうケースなどが見られました。

では、どのようにすれば、上記の(1)～(4)の取組ができるのでしょうか。ここでは、その一つの方法として、全教職員で、学校や地域の実態に応じた、「確かな学力」を身に付けためざす子ども像を作成し、評価の指標まで作成する流れを紹介します。

2 「確かな学力」を身に付けためざす子ども像を協働作成する方法

(1)ビジョン作成の目的

各学校のめざす子ども像や取組、指標を作成し、長期的ビジョン（3～5年間）を明確にする。さらに、作成したビジョンに基づいた取組を総合的かつ重点的に展開することで、より取組の効果を高め、児童生徒に「確かな学力」を身に付けさせる。また、その成果を検証することにより保護者、地域に対する説明責任を果たす。

(2)事前準備

①作業までに、教務部、研究部などで、次の文献を各教育機関のHPからダウンロードなどして印刷して配布し、全教職員が読んでおく。

- ・「しまね教育ビジョン21」、地域の課題や展望が書かれた「市町村広報」など
- ・各学校の学校要覧に示された学校教育目標と重点目標（施策）
- ・「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」
(中央教育審議会答申)（平成15年10月7日）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/03100701.htm

※現行学習指導要領改訂（平成15年12月）の基になった答申で、「新しい義務教育を創造する」（答申）にその趣旨が繋がっており、現行の学習指導要領の課題と当面の改善方策が書かれている。

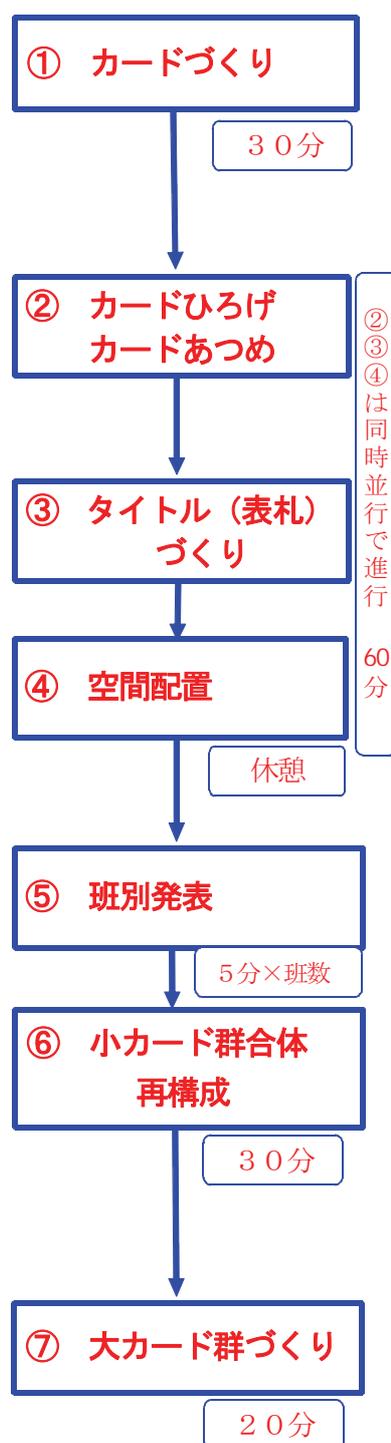
- ・「審議経過報告」（中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会）
(平成18年2月13日)

※今後の学習指導要領改訂の基となる報告。

- ②グループ ～ 1グループ 5～7名で編成し、各班の発表者を決定しておく。
- ③作業場所 ～ 作業がしやすいように、大きい部屋を確保しておく。
- ④準備する用具

B 4判用紙を横に半分に切った用紙（カード）
枚数は、人数×10枚+班数×15枚（タイトル用）
ポスターカラー（黒を全員分、赤[タイトル用]は各グループ1本）

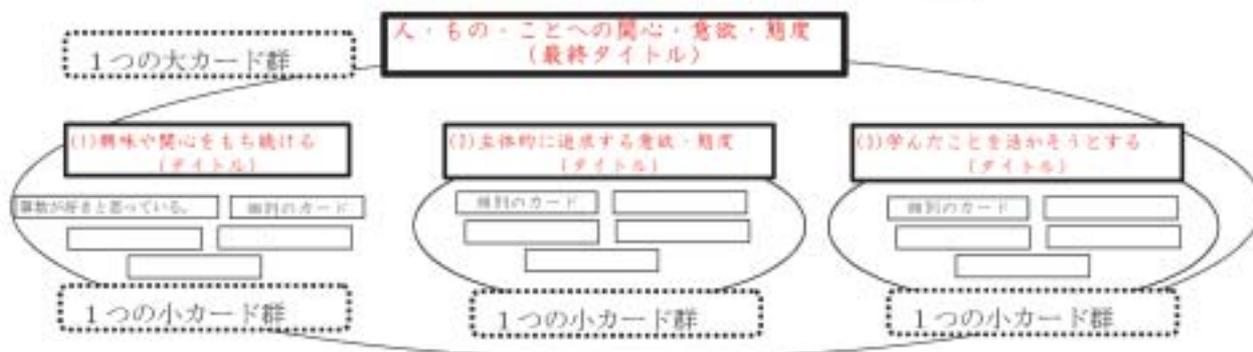
(3)ビジョンの作成作業1(所要時間:説明・休憩を含め約4時間)



- ① B 4判用紙を短冊状（半分）に切った紙（カード）に「〇〇学校がめざす『確かな学力』を身に付けた子どもの姿」について、教職員それぞれが描くめざす姿を、授業場面や日常生活の場面をイメージしてポスターカラーで記入する。
※ B 4判半紙を使う理由は、後の班別発表の際に、他の班のイメージを共通理解し、カードを合体する時の作業を全体で進めやすくするため。
- ② 班別に、各教職員が、カードに書いた考えや背景、意図を語りながら個々のカードを紹介し、KJ法*1によりグルーピングして、10～15程度の小カード群をつくる。
※ すべてのカードを無理にどこかのグループに入れようとせず、“離れ猿”，“一匹狼”を大切にす。
- ③ グルーピングした小カード群にタイトル（表札）をつける。
※ タイトルは、元の言葉の土の香りを残し、ソフトな表現でびたりと言います。
- ④ グルーピングした小カード群同士の関連を考え、空間配置を行う。空間配置には、次のような方法（例）がある。
ア 基盤となる資質・能力・態度を表した小カード群から、より発展的な小カード群へと順番に配置する。
イ 小カード群の相互の関係を、因果関係や背景、影響などにより関連付け配置する。
- ⑤ 班ごとに、完成した空間配置について、タイトル（表札）と代表的なカードを紹介しながら、発表し合う。（代表者が発表）
- ⑥ 各班の小カード群を、話し合いながら合体・再構成する。
※ 合体する際には、空間配置が最も共通理解しやすい1つの班を決め、その班の小カード群（個別のカードも広げておく）に、イメージを共有しやすくするため、1班ずつ他の班の小カード群を持ち寄り、合体していく。（班の数が多い場合は、2班ずつ合体してもよい）
※ 最初につくった小カード群を解体して、新しい小カード群をつくってもよい。
- ⑦ 小カード群をまとめて、いくつかの大カード群をつくり、大カード群ごとに最終タイトルをつける。（次ページの図参照）
※ 大カード群は最大でも8つ程度とする。それ以上の数では、イメージを共有しにくい。

*1 「KJ法」とは、文化人類学者・川喜田二郎氏が考案した問題解決の技法で、意見・発言をカードに記入し、そのカードを分類しまとめていくことで、アイデアを得ます。「KJ法」の名称は、川喜田二郎氏の頭文字をとって名付けられています。

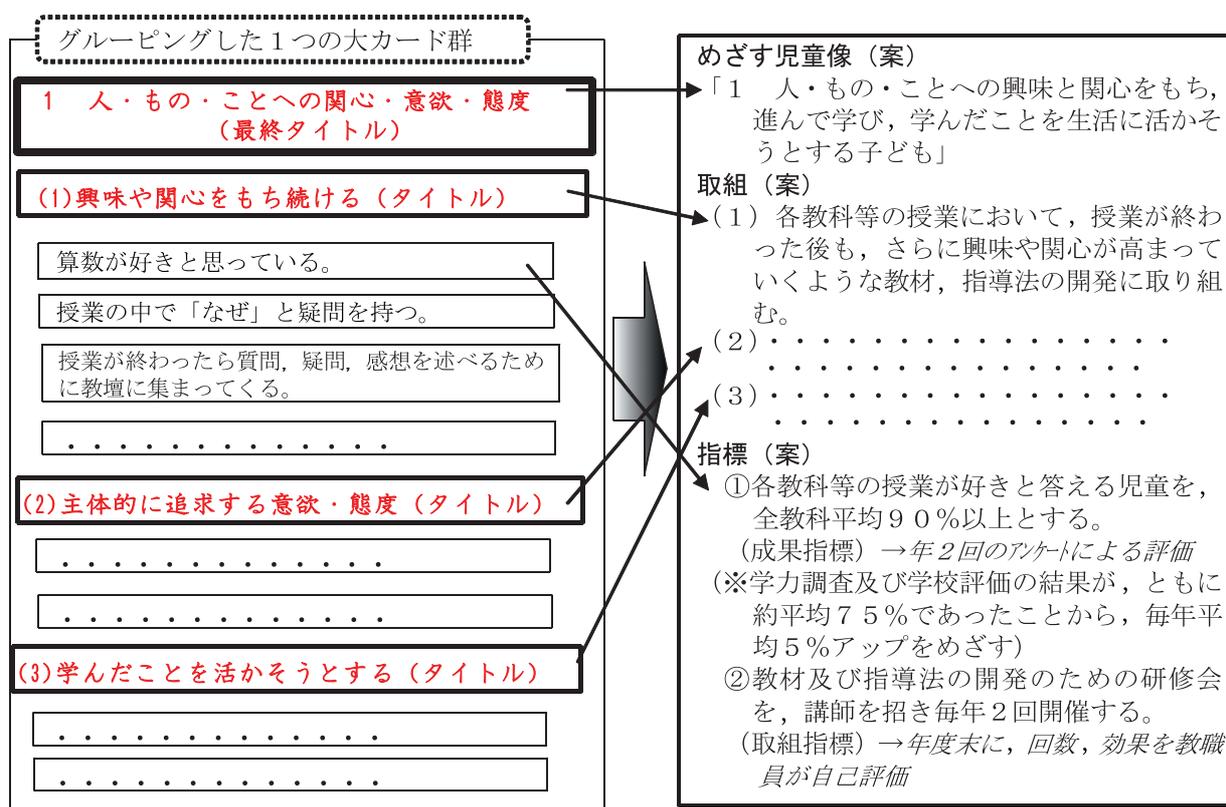
完成した大カード群の構成図（例）



(4) ビジョンの作成作業2

- ① 大カード群ごとに担当者を決定し、カード群ごとに、ふさわしい文章を考え、「めざす子ども像（案）」（最終タイトルから作成）と「取組（案）」（小カード群のタイトルを実現するために学校がどのように取り組むかを示した文章）を作成する。また、小カード群の中のカードの中から、「指標（案）」となる成果指標（案）または取組指標（案）をピックアップし、学校の実態を考慮して指標（案）を決定する。
各案を作成する上で必要なカードがない場合は、新たに担当者が作成する場合もある。また、作業の中で、他の大カード群や小カード群に移動した方がよいカードも出てくるので、大カード群の場合は他の担当者と話し合って移動するかどうか判断する。
- ② 作成した「めざす子ども像（案）」「取組（案）」「指標（案）」を、全教職員で検討し決定する。
- ③ 「指標」である成果指標（案）、取組指標（案）について、数値化が可能なものは協議の上、数値化する。また、誰がいつどのように評価するかなどの評価計画を立てておく。

カード群からめざす子ども像、取組、指標の各案を作成した例（3年間の長期ビジョン）



2 自校の課題の明確化と取組の重点化を図るために（学力調査結果説明会より）

1 学校が「説明責任」を果たすために

自校の学力の課題をこれまでの経験知だけから漠然ととらえるのではなく、客観的なデータ（学力調査の結果データ等）に基づいて課題を明確化することが課題解決には不可欠であり、誰もが納得のできる説明をすることが、今学校に求められています。

そこで、学力調査結果帳票を活用しながら、自校の学力の課題を明確にしていくプロセスを紹介します。

2 学力調査結果帳票の有効活用

学力調査結果帳票の「学習の基礎となる力」、「社会の中で生きて働く力」の状況分析から、自校の「強み」と「弱み」を見つけ、自校において、どの活動が効果をあげているのか、または、何が課題なのか、その課題を解決するためにはどのような取組が必要なのかを考えることが大切です。

3 演習を実施するにあたって

- ◆グループ ～ 1グループ－5～7人で編成
- ◆演習時間 ～ 100分程度（途中休憩有り）
- ◆演習で準備するもの

- ・学力調査結果帳票
 - 演習3-3-1「学習の基礎となる力」の状況分析
 - 演習3-4-1「社会の中で生きて働く力」の状況分析
 - ※ 学力向上ハンドブック演習シートから
- ・付箋紙 1グループ1束（100枚）×2色（青，赤）×グループ数
1人10枚程度×1色（緑）×参加者数
- ・自校の状況の整理表（A3判） 1グループ1枚×グループ数
※整理表の様式は島根県教育用ポータルサイト〔要項・様式のダウンロード（小・中学校）〕からダウンロードできます。
- ・A3判用紙（白紙） 1グループ3枚×グループ数

4 演習の進め方

（1）演習シートから、「学習の基礎となる力」、「社会の中で生きて働く力」の自校の強み」と「弱み」を明らかにする。

演習シートから、「学力A層」の範囲に位置づく項目（強み）を「青のマーカー」で、「学力C層」に位置づく項目（弱み）を「赤のマーカー」を使って塗り分ける。

（2）自校の「弱み」の教科学力への影響度を探る。

（1）でマーカーをつけた演習シートから、「弱み」の項目を赤の付箋紙に、「強み」の項目を青の付箋紙に書き写す。その際、付箋紙には「A-C」の値を書き込んでおく。

※ A-Cの数値が高いほど学力影響度が高いと考える。

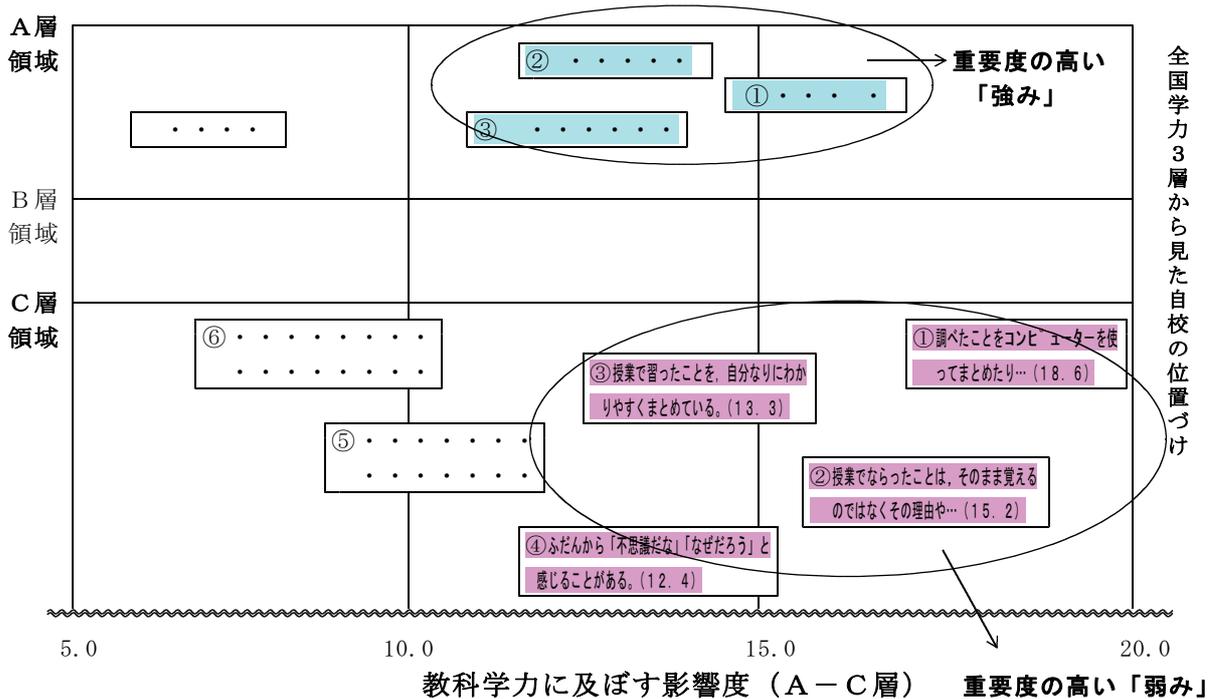
(3) 書き写した付箋紙を、数値に基づいて「自校の状況の整理表」に貼る。

(4) 「自校の状況の整理表」のC層の欄に貼られている付箋紙の中で重要と思われるもの（C層の欄のA-Cの値が10以上のもの）をまとめて線で囲む。

※A層の欄も同様に行う。

※貼り付けた付箋紙を線で囲むことにより、視覚的に自校の「弱み」や「強み」をとらえることができる。

(5) A-Cの値の大きな項目から順に①, ②, ③…と番号をつけ、課題の重要度を確認する。



(6) 重要度の高い「弱み」を解決していくために考えられる方策について各自で思いつくことを付箋紙（緑）に記入し、A3判用紙（白紙）に貼る。

※ KJ法（P13参照）を用いて、明らかになった『重要度の高い「弱み」』を解決するための方策を考えてグループで話し合う。

- ・書き出した解決策を一人ずつ発表する。
- ・A3判用紙（白紙）にコメントをつけながら書き出した付箋紙（緑）を貼る。
- ・1つの「弱み」について、1枚のA3判用紙（白紙）を使う。（1回の会議では3～4枚程度が適当）
- ・メンバーがそれぞれ順に付箋紙（緑）を貼り付けていく。

(7) 内容が似ているもの同士をグルーピングし、タイトルをつける。

(8) グルーピングしたものの同士の関連を見て、さらにグルーピングし、タイトルをつける。

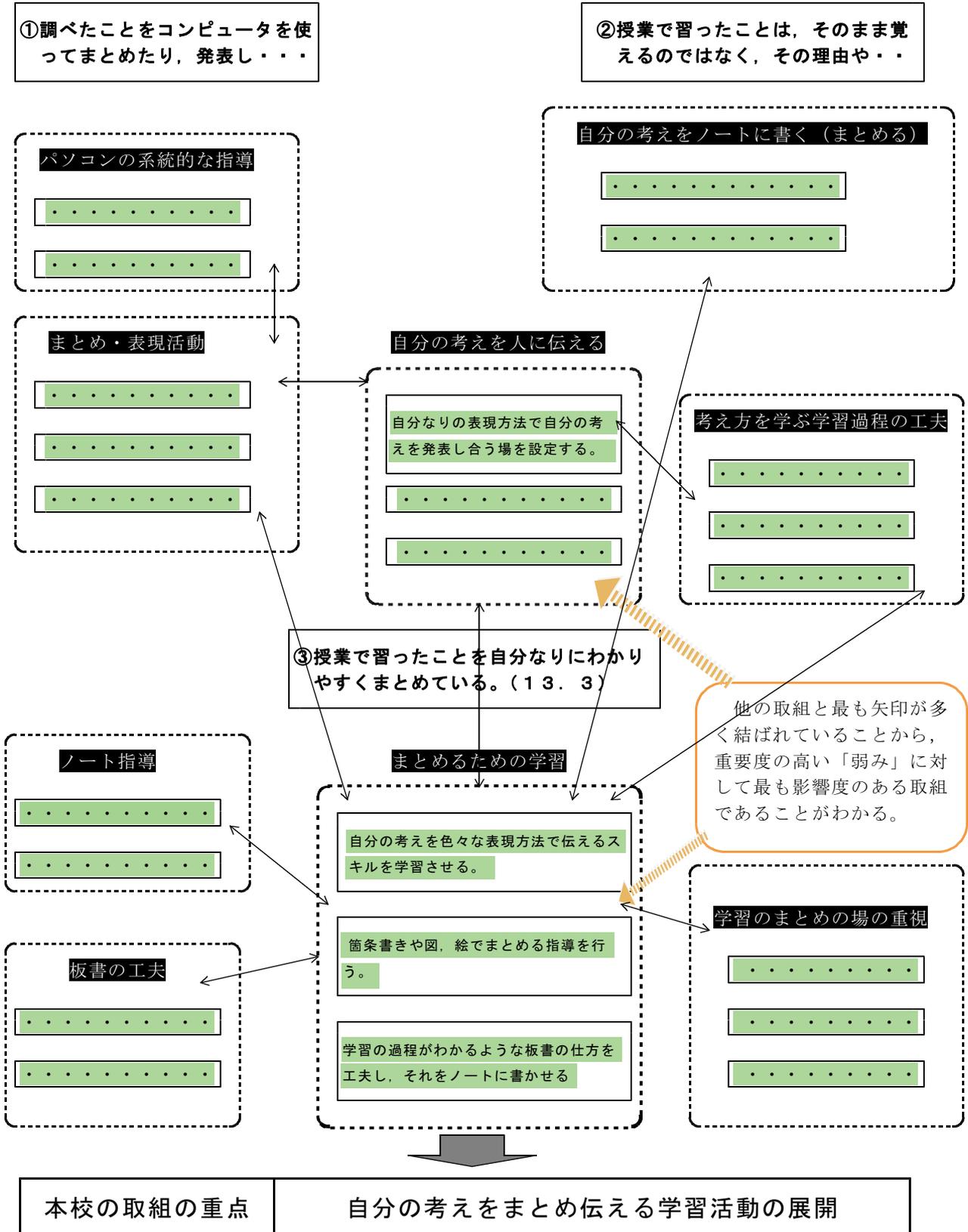
(9) 大きなまとまりごとに、相互の関係を見て、関係のあるもの同士を矢印で結ぶ。

(10) 解決方法の中核となっている取組（最も多くの矢印で結ばれている取組）を見つけ、学校の重点的な取組を決める。

例 「自分の考えをまとめ伝える学習活動の展開」

(11) 重点的な取組の具体的な解決方法を話し合う。

例 本校の重要課題としてとらえた上位3項目（重要度の高い「弱み」）から課題解決のための方策を考える。



3 自校の課題を解決するための手だての明確化のために (教頭研修より)

1 課題解決のための改善策の要件

前項では学力調査結果や学校評価等の結果から、課題を明らかにし、取り組む課題の重点化を図る方法について説明を行いました。次の段階では、課題を解決するための改善策を立案することになります。

自校の課題を解決するためには、立案した改善策が、次のような要件を備えていることが大切であると考えられます。

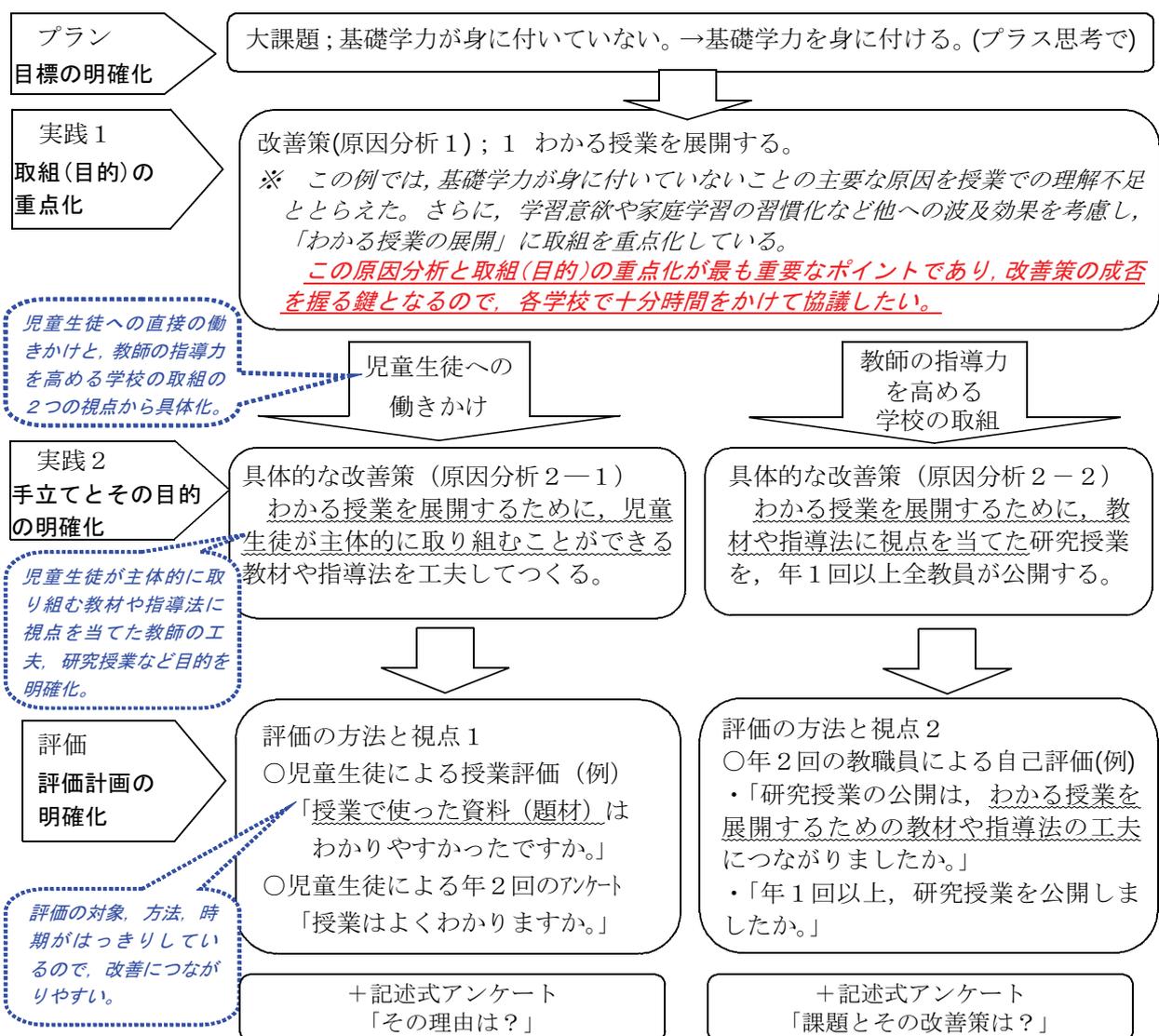
- (1) 課題を生み出している原因と対応していること。
- (2) 課題の原因を多角的・多面的に分析し、主要な原因と付随的な原因に分けられていること。
- (3) 主要な原因に対応するとともに、波及効果の高い取組が、重点施策として位置づけられていること。
- (4) 児童生徒、教職員、保護者の実態に応じた取り組みやすいものであること。

このような要件は、初めから十分に備わっているものではなく、プラン→実践→評価→改善→プラン→実践・・・のPDCAサイクルを繰り返すことで、次第に成果をもたらす改善策へと高められていきます。

そのためにも、立案した改善策が、評価できる策にまで具体化されていることが大切です。

2 改善策の立案と評価の作成例

では、1つの例として、次の大課題を、評価できる改善策まで具体化してみます。



3 改善策をよりよいものにしていくための評価項目作成のポイント

2の改善策の立案と評価の作成例を見ると、特に、学校の取組がよりよいものに改善されていくためには、評価項目等の作成に少し工夫が必要であることに気付かれたと思います。そこで、評価項目等の作成のポイントを次のようにまとめてみました。

【評価項目等を作成する上でのポイント】

- (1) 評価することが、具体的で明確な改善策（手だて）になっている。
- (2) だれが評価するかははっきりしている。（児童生徒、教職員、保護者etc.）
- (3) いつ評価するかがはっきりしている。（授業、単元末、学期末、年2回、年度末etc.）
- (4) 評価方法がはっきりしている。（授業評価シート、発表、作品、教職員の自己評価etc.）
- (5) 児童生徒による評価では、自己評価ではなく、教師の取組や働きかけを、児童生徒の活動や思考のしやすさ、役立ち感、めあてなどに置き換えて質問する。

なお、自己評価も適宜取り入れ、児童生徒自らの改善も促す。

児童生徒による授業評価項目の例(思考力の育成のために教師が資料を工夫した場合)
ア「自分の考えを、資料をもとに書くことができましたか」

教師が準備した資料説明がわかりやすかったかどうかは、この質問からは直接検証できない。したがって、手だての工夫の改善に直接つながりにくい。

イ「自分の考えを書く時に、先生が準備した資料は役立ちましたか。」

具体的な手だてが示されており、その手だてがよかったかどうかを質問しているので、児童生徒にとって回答（評価）しやすい。

※ したがって、アよりもイが、授業改善や教育課程改善につながりやすい。

(6) 重点事項の発見は数値評価（4段階）で、改善の手だてを探るには記述式アンケートで、というように、それぞれの評価方法の長所を生かす。

[例] (a) 「授業で使った資料は分かりやすかったですか。」

4：そう思う 3：ややそう思う 2：あまりそう思わない 1：そう思わない

(b) なぜそう思いましたか。理由を書いてください。

さらに、選択した番号の理由を尋ねることで、資料活用についての具体的な改善策が見えてくる。授業評価（授業レベルや単元レベル）で理由まで尋ねる場合もあれば、学期末の児童生徒評価でまとめて尋ねる方法もある。

4 授業評価等を通して教育課程改善を図るために（リーダーセミナーより）

1 教育課程改善につなげる授業評価及び単元評価

(1) 授業改善の必要性

各学校においては、学力調査結果等から見えた課題を解決するための学力向上策が立案されました。様々な視点からとらえられた対応策の中には、授業改善にかかわるものがほとんどの学校に含まれており、その重要性が改めて認識されました。

リーダーセミナー I では、授業改善を進めていく上で、児童生徒による授業評価及び、学年部、教科部等の組織による単元評価を進めるシステムに焦点を当てた研修を実施しました。

以下、授業改善を進めていく上で有効な児童生徒による「授業評価シート」及び組織で取り組む上で有効な「単元評価シート」の作成について記述します。

(2) 児童生徒による授業評価シート作成に当たっての配慮事項

- ① シートの項目に以下の視点が含まれているかどうか確認します。
 - (ア) 授業の興味・関心を問う質問が入っているか。
 - (イ) 理解度，達成度を問う質問が入っているか。
※入ってなくても，他のデータから理解度のチェックは可能です。
 - (ウ) 指導内容，指導方法，指導形態等にかかわる質問が入っているか。
 - (エ) 進度にかかわる質問が入っているか。
- ② できるだけ，子どもたちが容易に答えられるような具体的な問い方をします。
- ③ 学校間，学年間，教科間で共通する項目も必要ですが，自分だけの強みを生かした項目を設定することも自信につながる点で有効です。
- ④ 毎時間の作成は難しいと考えます。できる教科，できそうな単元・題材から，取り組んで行きます。研究授業で取り組む単元・題材の授業からやってみると取り組みやすいです。
- ⑤ 授業評価シートの活用は，授業評価の1つの方法です。他にも，小テスト，子どもの作品，発表，観察などいろいろな方法を活用して，授業評価を行っていくことが必要です。授業評価は，授業改善にもつながる取組ですが，何よりも，次の単元評価につなげるためのデータを集める作業です。
- ⑥ 児童生徒から評価を得る場合は，しっかり，授業評価の趣旨を児童生徒に説明しておかなければ，興味本位で，いいかげんな評価になってしまいかねません。
- ⑦ 授業評価後は，できるだけ早く集計し，結果等からすぐに指導に活かせるものは活かしていくと，児童生徒も授業評価をしてよかったと実感できます。評価を行っただけにならないよう留意することが大切です。

(3) 単元評価シート作成にあたっての配慮事項

- ① 授業評価シートと異なり，単元評価シートの評価項目の内容は，やや大枠でとらえます。
- ② 授業評価で得られたデータ（授業評価シートも含めて）や単元末テスト，前年度のデータ等を基に単元評価シートの項目をチェックしていきます。単元評価シートに評価方法を記載する項目があると，より視点が明確になります。
- ③ 単元評価シートの項目の内容は，直接指導力にかかわるものもありますが，むしろ，単元の構成にかかわる項目に重点を置きます。単元評価は教員個々の指導力の課題を見付けるというよりは，単元の課題を見付けるために行うものです。

【授業評価シート（例）中2理科】

	評価項目
学 習	1 進んで観察・実験に取り組むことができましたか。
	2 課題を理解した上で，見通しをもって活動しましたか。
	3 器具の使い方，実験操作がわかった上で，結果をまとめることができましたか。
	4 学習内容や重要語句を理解できましたか。
指 導	5 授業の進む速さはよかったですか。
	6 板書はわかりやすかったですか。
	7 説明はわかりやすかったですか。
環 境	8 学習しやすい雰囲気でしたか。
	9 先生はあなたの考えを認めてくれましたか。
	10 わからないところを友だちに聞いたり，先生に質問しやすい雰囲気でしたか。

【単元評価シート（例）小学校】

	評価項目
1	単元の目標が達成できたか。 (身に付けた力が身に付いたか)
2	評価規準は適切であったか。
3	児童に変容が見られたか。
4	時間数や時間配分は適切であったか。
5	単元構成や教材・教具・資料等は適切であったか。
6	指導方法や指導形態に工夫が見られたか。
7	発問や説明の仕方は適切であったか。
8	児童の考えや意見を授業の中で活かしていたか。
9	児童は授業にしっかり取り組んでいたか。
10	学校の教育目標を意識した授業をしていたか。

2 「授業評価」「単元評価」の活かし方

P D C A サイクルを機能させていくためには，各学校が，評価（C）から改善（A）を実際に図ることで，さらなる改善への意欲をもつことが重要であると考えられます。

授業評価・単元評価の結果を基に，改善が必要な課題については，短期的・中期的な視点から，新たな改善策を立案していくこととなります。次の授業や単元にすぐにつなげていかなければならない改善策もあれば，年間指導計画など，長期休業日等を使って，じっくり練っていく必要のある改善策も課題によっては出てきます。このように，授業レベル→単元レベル→年間指導レベルへと P D C A サイクルを機能させていくことが必要です。

授業改善，単元改善，年間指導計画・評価計画の改善に向けた P D C A サイクルのイメージを P22 に記載しています。

改善策の立案に向けた取組（例）
【重点目標「基礎学力を身に付ける」の場合】

改善策	具体策	【P・D】						【C】		【A】				
		評価目的	評価時期	評価者	評価方法	評価内容	評価の指標	評価	評価	改善策				
1 わかる授業を展開する	(1)学習内容を具体的に理解していくために、取り組みやすい教材を工夫してつくる。 (社会科) ・効果的なワークシートの活用	(1)の具体策が有効であるかどうか検証するために	①授業または単元終了時	児童生徒	授業評価	<ul style="list-style-type: none"> ☆「●●の授業で使ったワークシートはわかりやすかったですか。」 ☆「なぜそう思いましたか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・70%以上が「3」以上を回答 ☆記述式アンケートより「書きやすい様式」「まとめやすさ」「読みやすさ」等の視点にふれてある。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・60%が「2」「1」と回答 → (改善が必要) ☆記述式アンケートより・・・(例) ・もっと自由に意見がまとめられるワークシートの方が書きやすい。 ・字がたくさんあって読みづらい。 → (改善につながるものをピックアップする) 	だれが	学年部（教科部）で	何の目的で	児童（生徒）がねらいをもって具体の例を基に理解を深めていくことができるようにするために	いつまでに	①今週中に ②今月中に
			②授業後（研究授業）	教職員	授業評価	<ul style="list-style-type: none"> ☆「授業で使われていたワークシートは児童（生徒）にとってわかりやすいものでしたか。」 ☆「なぜそう思いましたか。」 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・70%以上が「4」「3」を回答 ☆記述式アンケートより「書きやすい様式」「まとめやすさ」「読みやすさ」等の視点にふれてある。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・70%が「2」と回答 → (改善が必要) ☆記述式アンケートより・・・(例) ・授業の流れに沿って分かりやすくまとめられているが、児童（生徒）に創意工夫できる形式の方がよい。 → (改善につながるものをピックアップする。) 	だれと	研究主任の意見を聞きながら	何をする	①次単元「◎◎」で使用するワークシートを児童（生徒）が創意工夫できるような内容を取り入れて作成する。 ②単元「●●」で使用したワークシートを児童（生徒）が創意工夫できるような内容を取り入れて修正する。（来年度用）		
2 学習したことを振り返ったり、繰り返し	(2)定着率が低い知識や技能を明確にし、重点化を図る。 (3年算数科)	(2)の具体策が有効であるかどうか検証するために	①単元終了時	授業者	単元テスト（技能問題）	単元の技能に関する評価規準に基づいた問題	<ul style="list-style-type: none"> ☆正答率が70%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ☆正答率が50%と低い → (改善が必要) 	だれが	学年部で	何の目的で	知識や技能の定着率を高めていくために	いつまでに	①今週中に ②夏季休業中に
			②授業または単元終了時	児童生徒	授業評価	<ul style="list-style-type: none"> ☆「3けたのたしざん（ひきざん）の計算の仕方がわかりましたか。」 ☆「授業について希望したいことを書いてください。」 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・70%以上が「4」「3」を回答 ☆記述式アンケートより知識・技能の定着にかかわることがらふれられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆数値評価より・・・50%が「2」「1」と回答 → (改善が必要) ☆記述式アンケートより・・・(例) ・もう少しゆっくり教えてほしい。 ・少ない人数の中でくわしく教えてほしい。 ・生活の中で使ってみたい。 → (改善につながるものをピックアップする) 	だれと	教務主任の意見を聞きながら	何をする	①単元「3けたのたしざんとひきざん」の指導計画を次の視点で修正する。 ④時数を2時間程度増やす。 ⑥コース別学習（習熟度別）を単元指導計画の中に位置付ける。 ⑦総合的な学習の時間の単元「○○」と関連づける。 ②単元終了後にその都度年間指導計画評価計画を修正しておき、夏季休業中に修正した年間指導計画・評価計画を再度検討する。場合によっては、2学期以降、定着率の低かった単元と類似した単元において可能な限り④～⑦の視点で修正する。		

平成18年度

学力向上フォーラム発表校実践事例

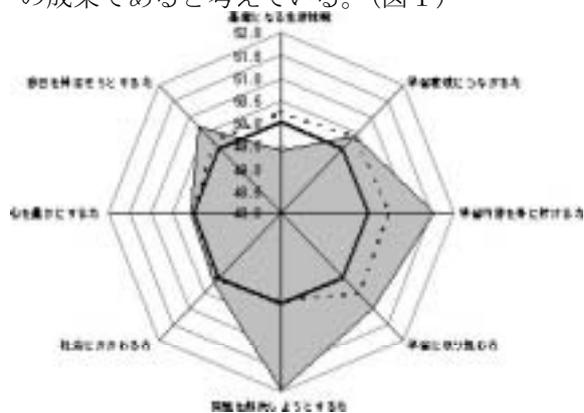
学校名：出雲市立大津小学校
 所在地：出雲市大津町370番地1
 HP：http://www.izumo.ed.jp/otsu-sho/
 学校規模：23学級 672名

(学力向上パイオニアスクール事業)

1 研究の概要

(1) 研究の経緯

平成14年度から進めている「総合的な学習の時間」の研究実践は、児童の「問題を解決しようとする力」を高めるとともに、「プロジェクト学習」など、課題解決型学習における指導力の向上につながった。本年度実施した学力調査の意識調査の結果でも、「問題を解決しようとする力」は他の項目と比べ肯定的な回答が多く、「総合的な学習の時間」の取組の成果であると考えている。(図1)



意識に関する調査結果 (図1)

しかし、教職員へのアンケートや意識調査の結果から、全学年を通して自分の考えを他者に伝える力や、基礎となる生活体験にやや「弱み」があることが分かった。また、「学力向上」については、教職員の共通理解を図り、全校体制による組織的な取組が必要であることが分かった。

そこで、今年度は伝え合う力の育成をめざし評価活動を指導に生かすことを中心として、下記の通り研究に取り組むこととした。

(2) 研究テーマ

成長欲と知恵をもち、自ら道を拓く子ども
 ~Get Think Do~

(3) 研究のねらい

- ①他者や社会とのかかわりの中で、相手の考えを理解したり、自分の考えを表現したりしようとする子どもを育成する。
- ②確かな学力の向上をめざし、RPDCAサイクルを生かした教育課程や授業の改善を図る。

(4) 研究の内容

- ◎研究のねらい①に関連して
 - 国語科を中心とする授業における伝え合う場の設定
 - 伝え合う力を育成するための支援の工夫
 - 自らの伸びを意識し、意欲的に学習に取り組むための自己評価カードの作成・実施

(図2)

「話す力」「聞く力」自己ひょうかシート (3年) 月 日	
■話す力	得意だった よくできた
① 聞いている人にとどくような声で話すことができましたか。	1 2 3 4 5
② 聞いている人に分かるような速さで話すことができましたか。	1 2 3 4 5
③ 話の順じよを考えて話すことができましたか。	1 2 3 4 5
■聞く力	
④ 話している人を見てうなずきながら聞くことができましたか。	1 2 3 4 5
⑤ 話している人が伝えたいことは何か考えながら聞くことができましたか。	1 2 3 4 5
⑥ もっと知りたいことをしつもんすることができましたか。	1 2 3 4 5
年 組 名 前 ()	

3年生自己評価シート (図2)

◎研究のねらい②に関連して

- 「確かな学力向上策」の共通理解と意識化 (図3)
- 「確かな学力向上策」推進のための研究組織の見直し
- 授業改善のための授業評価の実施と活用

育てたい力	基本方針に対する意識	自己評価
学びに向かう力	「朝食を摂る」「睡眠時間を確保する」など、基本的な生活習慣の育成をめざし、家庭との連携を図りながら、家庭と共に子どもを育てようという意識をもっている。	十分 不十分 A B C D
生きる力	地域や家庭と連携し「ふるさと教育」の推進を図り、豊かな自然体験、生活体験や社会体験を積むことで社会性を身につけさせようとしている。	A B C D
教科学力	各教科、総合的な学習の時間などにおいて、課題追究力や問題解決力を伸ばし、課題をねばり強く追究する態度を育成しようとしている。	A B C D
	各学年や教務部の時数運営管理のシステムを把握し、授業時数の確保に努めようとしている。	A B C D
	学習指導の「PDCA」を生かし、「80%実現」を学習達成の必達目標とする。もし、成果が見られない場合は、点検・評価して、具体的な指導方法を検討している。	A B C D
	少人数指導などきめ細かな指導を充実し、指導形態や指導方法を工夫しながら、一人ひとりの学力向上を目指すとともに、発展的学習・補充的な学習に積極的に取り組んでいる。	A B C D
	教科担任制を生かした指導体制を取り入れ、「すべての子ども達をすべての教職員で育てる」ことを基本とし、指導方法や指導成果についての情報交換を行うことを通じて、指導力を高めようとしている。	A B C D
	特別支援教育などの体制を充実させ、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援の充実を図り、「できた」「分かった」などの成就感、達成感を持たせるような授業展開をしている。	A B C D
表現力	児童の実態に合わせ、関わり合い、伝え合う場を効果的に設定したり、個に応じた支援の仕方を工夫したりし、「話す力・聞く力」の定着を図ろうとしている。	A B C D
	「短スピーチ活動」や「詩の暗唱」活動に取り組むなど、表現活動を日常化させるよう努めている。	A B C D
	発表する際の「話し方」、「聞き方」の統一を図り定着させることで、「話す力、聞く力」の基礎力の定着を図ろうとしている。	A B C D

教員に対して行ったアンケート (図3)

(5) 成果の検証方法

◎研究のねらい①に関連して

- 伝え合う場を設定し、支援の在り方を明確にした授業実践と授業研究
- 授業の前後の自己評価の比較による児童の意識変容の検討

◎研究のねらい②に関連して

- 「確かな学力向上策」についての教師の意識変容の検討 (図3)
- 授業評価カード (児童用)、授業評価シート (教員用) を活用した授業改善の取組の変容の検討

2 研究の実際

(1) 授業等における伝え合う場の設定と自己評価カードの実践

伝え合う力の育成のために、「話す力・聞く力」の育成を図ることからアプローチした。そのために、授業に「意欲的に話し合う場」を意図的に設定したり、自らの考えを明確にするためにワークシートなどの「書く」活動

を取り入れ、「話す・聞く」ための支援を行った。その結果、児童には意欲的に話そうとする姿が徐々に見受けられるようになってきた。(写真①)



インタビュー形式を取り入れた授業実践(写真①)

また、授業や活動の前後に自己評価を実施することで、児童がその活動のねらいを自覚するとともに、教師も、ねらいをより意識し効果的な支援を展開することができた。

(図4)また、意図的に自己評価を取り入れることは「自分の伸び」を自分で確かめ、さらに伸びようとする児童の育成につながると考えている。

「聞いている人とどくような声で話すことができましたか。」



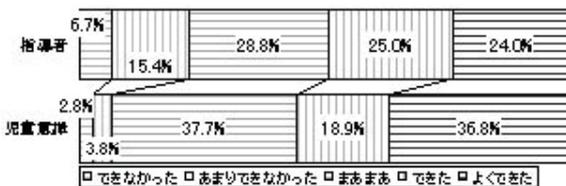
4年生意識調査の比較(図4)
 <1回目H18.6月 2回目12月調査>

(2) 評価活動を指導の改善に生かす実践

学力向上のための方策の一つとして、評価活動を指導の改善に生かすよう工夫した。

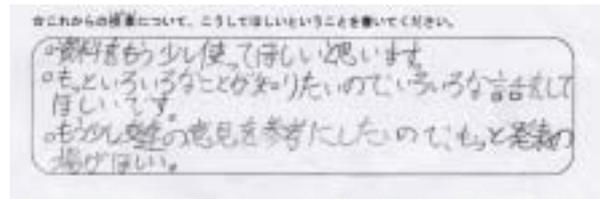
まず、児童の意識調査と指導者の評価を数値化し、その間にある「ずれ」を分析することで、その後の指導の在り方や評価言のあり方に生かすよう努めた。(図5)

「みんなに聞こえる大きさの声で話すことができましたか。(2年)」



指導者による評価と児童の意識との比較の一例(図5)
 <H18.12月調査>

また、児童の授業への関心や授業内容の理解度を調査したり、指導内容や指導法が適切かどうか調査するために、児童による授業評価を実施したりした。(図6)



児童による授業評価(図6)

3 研究の成果と課題

(1) 成果

○学習場面に伝え合う場を設定し、その学習活動を自己評価させる活動を継続して実践したことは、「伝え合う力」に対する意識を高めるとともに自己評価力の育成の基盤づくりにつながったと考える。

○国語科で身につけた「話す力・聞く力」や「書く力」を發揮する場として、「総合的な学習の時間」や「生活科」の時間を積極的に活用し、指導を進めたことは、児童に「伝え合う力」をつけるために有効であることが分かってきた。(図7)

【自己表現力】人の前で話す力



「総合的な学習の時間」における児童の意識調査の過去3年間の推移(図7)

○「話す力・聞く力」に関する「身につけさせたい力」について、児童がどの程度ねらいを達成したと意識しているかを数値化したり、同じ観点における指導者の評価を数値化し、比較、分析したりしたことは、児童理解が深まり、今後の研究方針やその在り方を探る基盤づくりにつながった。

(2) 課題

○「相手に伝わるように、話をまとめて書く、話す」といった力や「図、表を含めた資料の意味を読み取り、解釈し、評価する」といった力を「総合的な学習の時間」の活動で生かすとともに、「国語力」の育成につながるように学校教育全体を見通した指導を進める必要がある。

○家庭との連携を図るために、「基本的な生活習慣に関するアンケート調査」を実施し、その結果を保護者に伝えた。今後もこのような調査結果や児童の学習活動、及び成果について、家庭と学校とが双方向に情報を発信し合う必要がある。

○教師の指導力、授業力を高めるために、互いに評価し合い、児童の評価を指導に取り入れた授業実践を重ねていく必要がある。

学校名：江津市立青陵中学校

所在地：江津市二宮町神主1964-8

HP：http://www.iwami.or.jp/seiryu/index.html

学校規模： 12学級 319名

(確かな学力育成のための実践研究事業)

1 研究の概要

(1) 研究のテーマ

「自ら学び、心豊かでたくましく生きる
実践力のある生徒の育成をめざして」
～生き生きと活動できる
場づくり・集団づくりをめざして～

(2) 研究のねらい

本事業指定地区の2小学校・1中学校に共通する実態を踏まえ、推進地区として、基礎・基本の充実、主体的な学び、学習集団の高まりの3点から重点目標と推進校間における系統的な具体目標を挙げ研究・実践に取り組んでいる。本校では、生徒の「確かな学力」を育成していくためには、直接的な学力の育成と共に学習基盤の育成が不可欠であると考え、その両面から実践研究に取り組むこととした。

(3) 研究仮説

- ア 基礎・基本の確実な定着に向けて、丁寧な繰り返し指導と思考力、判断力、表現力を育成する指導を重視すれば、一人ひとりに生きる力の柱となる「確かな学力」を身につけさせることができるのではないかと。
- イ 自分の生き方やより良いあり方を考え、目標を明確にもたせ、また、学習に対する意欲を喚起すれば、学力の基礎となる学習習慣や生活習慣を充実させることができるのではないかと。
- ウ 豊かな人間関係をもち、互いに認め合い、支え合い、競い合い、ともに伸びようとする学習集団であれば、意欲的・主体的に「確かな学力」を身につけ、伸ばしていくことができるのではないかと。

(4) 本年度の取り組み

- ①基礎・基本のより一層の定着を図る。
・PDC Aサイクルの機能化と読解力育成に視点をあてた授業改善
・補充的な学習の重視
・学習評価指標による生徒の学習状況の把握と指導の改善
- ②学力の基礎となる学習習慣や生活習慣を充実させる。
・学級活動や道徳の時間の充実、相談活動(「夢相談」等)の活性化等からの意識の向上、夢や目標の具体化
・授業の受け方、学習の進め方、学習計画の立て方等についての計画的指導
・授業、家庭学習時間、家庭生活等の実態把握(「授業生活記録ファイル」「あゆみ」「デイリーライフ」「学習時間調査カード」等)
・家庭・地域との連携、発信(「夢通信」、Web ページ、PTA 対象の座談会、公開ウィーク、アンケート等)
- ③集団としての学びを深めていく。
・人権集会等各種行事を通して集団づくりを進める。

(5) 評価方法

- 【数値で測れるもの】
・学力調査(県学力調査：教科に関する調査、NRT)
・学習適応性検査(県学力調査：意識調査、AAI)
- 【代替指数を用いて数値で表すことができるもの】
・調査・アンケート(生徒、保護者、教員)、学校評価
・校内テスト、教科テスト、各種小テスト
- 【その他】
・平素からの実態把握(「授業生活記録ファイル」、「夢相談カード」、「あゆみ」等、その他)
・作品、レポート、その他表現活動の評価・分析
・授業研究……観察、活動の分析、自己評価、相互評価
・学習評価指標
・保護者へのアンケート

2 研究の実際

1 (4) ①については、「読解力向上のための指導資料」(文科省)で示された指導改善の方向を参考に全教科で授業改善に取り組んでいる。ここでは国語科における取組を紹介する。

《国語科における取組》

(1) 指導の構想と計画

H17・18 年度に行った学力調査から、本校生徒の国語科の学力のうち「読むこと・書くこと」については、全学年とも十分達成されているとは言えない状況にあることがわかった。そこで、国語科の【つきたい力・伸ばしたい力】を下記の二点とし、特に一点めの力(「読解力」)については学習過程を明確にし、指導の重点化を図った。

【つきたい力・伸ばしたい力】

- テキストから目的に応じて情報を読み解き、それに対する自分の考えをもって表現する力
- ①テキストから目的に応じて情報を取り出す。(内容を正確に読み取る)
- ②取り出した情報を、解釈したり推論したりする。
- ③自分の考えをもって表現する。
- 言語事項について理解を深め、言語生活にいかしていく力

(2) 指導の工夫改善

これまで説明的な文章の「読むこと」の指導では、文章に書かれていることを課題に即して正確に読み取ることによって終わることも多かったが、読み取った内容(取り出した情報)に自分の経験や知識を付け加えて熟考し、自分の考えを書く学習活動を取り入れて実践してみた。以下は本時における主な学習過程と学習評価指標である。

対象学年		3年
【改善の視点】 ・ア(ア)目的に応じて理解し、解釈する能力の育成		
単元名	社会をとらえる(本時 4/20)	
1	本時のねらい ○説明的な文章を読んで、筆者の意見の根拠としてあげられていることを確実にとらえ、自分の知識や経験と結びつけて具体的に説明する活動を通して、筆者の考えについて理解し、解釈する力を育成する。	
2	テキスト『メディア社会を生きる』(部分)	
3	主な学習内容 (1) 文章を読み、メディアの「読み手」と「書き手」との関係をおおざっぱにとらえる。 (2) 文章から筆者が述べている「メディアのもつ性質」を取り出す。(ワークシート：[課題1]) (3) (2)を具体的にメディアを取り上げて説明する。(ワークシート：[課題2]) (4) メディアの読み書きに対する筆者の考えを整理する。	
4	評価 ●テキストから、筆者が述べている「メディアのもつ性質」の部分をとらえ、整理して書くことができる。([課題1]) ●具体的なメディアを取り上げて、わかりやすく[課題1]の説明をすることができる。([課題2])	

【国語科学習評価指標 a】

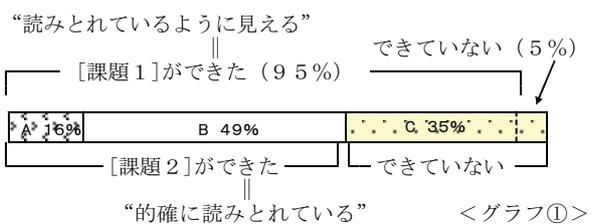
評価指針の観点	本時の自己評価シートの内容
1 学習の目的を理解する。	【課題】1・2に何を記入していくかははっきりわかりましたか。
2 見通しをもって読み取りを行う。	メディアの説明(【課題1】)について、テキスト(教科書文章)からきちんと取り出すことができましたか。
3 正確に読む方法・計画を考える。	効率よく正確に資料の読みを進めるための方法や計画を考え、実行することができたと思いますか。
4 読んで理解したことを整理・具体化する。	具体的な例(【課題2】)について、適切な例を取り上げ説明していく構想をもつことができましたか。
5 結論・理由を説明する。	具体的な例(課題2)について、自分の考えをもち、表現を工夫してわかりやすく書くことができましたか。

【自己評価基準】

- 1：まったくできなかった 2：できなかった方である
3：できていた方である 4：できていた

(3) 見取りと評価

本時では、[課題1]でテキストからの情報の取り出しが正確にできたかどうかを見ることができる。そして[課題2]から[課題1]の理解が確かなものであるかどうか評価できると同時に、生徒は[課題2]に取り組むことによって[課題1]の理解をより確かなものにするできると考えた。本時の課題であるワークシートを3段階(A：十分達成できている、B：おおむね達成できている、C：達成できていない)で評価するとグラフ①のようになった。



【課題1】の回答から、95%の生徒がテキストから情報を取り出すことができたことがわかる。しかし、そのうちの約3割の生徒が【課題2】で適切に例示して説明することができていない。つまり、【課題1】からは読み取れているように見えた生徒も【課題2】に取り組ませることで、その3割が実は筆者が意見の根拠としていることを的確につかんでいなかったことが明らかになった。C層の生徒には指導の補充を行い、課題に再び取り組ませたところ、全体の87%の生徒がB層以上となった。

また下表①に示したように、前回行った読解力育成に重点を置いた、指導後の学習評価と比べると、学習の目的をよく理解して、ある程度見通しをもって課題解決に取り組んでいることが分かる。そして教材が比較的苦手とする説明的文章（今回は文学的文章）であったにもかかわらず、今回は課題解決に対する満足感・達成感が高くなっている。 <表①>

評価指標の観点	1	2	3	4	5
前回（文学的文章）	3.2	2.7	3.1	2.9	3.0
今回（説明的な文章）	3.4	3.0	3.1	3.2	3.2

(4) 成果と課題

「読解力」の育成に視点をあてた指導を工夫することにより、生徒の読みがより確かなものになっていくのがわかる。また、このような課題に取り組む機会を多く経験することによって、生徒はその手法に慣れ、求められる力を伸ばしていくことが予想される。今後は指導の場の回数を増やすと同時に、生徒の思考過程を踏まえた段階的な指導、個や学習集団に応じた丁寧な指導等の工夫改善が必要と考える。

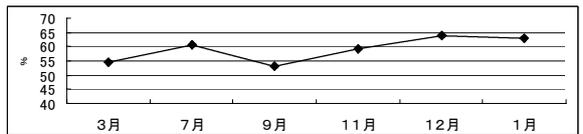
3 研究の成果と課題

(1) 研究仮説Aについて

- ①丁寧な繰り返し指導から

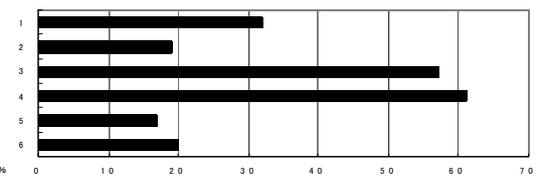
授業の始めや終礼時、放課後、夏休み等を利用して、小テストや補充学習を行った。校内の様々なテストでは下位層が減少した。
- ②全教科での「読解力」育成に視点をあてた授業改善から

「思考力・判断力・表現力の育成」に向けて、読解力育成の視点から全教科で授業改善に取り組んだ。下グラフ②は3年生国語科の「読むこと」の平均得点率の推移であり、わずかずつではあるが伸びが見られる。 <グラフ②>



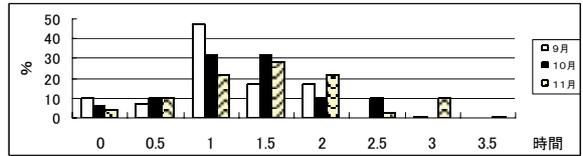
(2) 研究仮説イについて

生徒一人ひとりにきめ細かな指導を進めるため教育相談：「夢相談」を行った。グラフ③は事後の生徒アンケートの結果であるが、学習への意欲が高まり、目標・将来への見通し等の明確化などが進んだことがわかる。また特に1年生では「夢相談」を通して中学校の勉強の仕方がよくわかるようになったという生徒も多く、相談活動の効果があつたと考える。 <グラフ③>

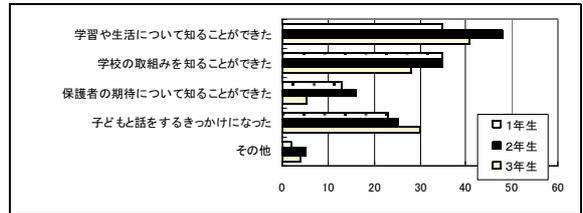


1. 勉強の仕方がわかるようになった。
2. 1以外の学習上の悩みが相談できてよかった。
3. 勉強をがんばろうという意欲が高まった。
4. 将来への見通しをが以前より持てるようになった。
5. 学級の雰囲気について相談できてよかった。
6. 友人関係や部活動等生活面について相談できてよかった。

また、本校では約5割の生徒が塾や家庭教師を利用しているが、塾等での学習以外の家庭学習の様子はグラフ④のとおりである。目標時間（15分×（6+学年））より短いのが着実に伸びており、特に相談活動の取り組みや働きかけが家庭での学習習慣の充実に影響していることが伺える。 <グラフ④>



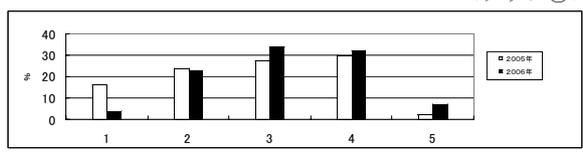
そして、本校の取り組みを保護者や地域の方が知ることが一層の理解や協力を促し、効果的な推進につながると考え、「夢通信」を発行した。この中で、保護者アンケートや生徒の学習に対する意識調査の結果や考察、また、「確かな学力」育成をめざして行っている細やかな学習指導・基盤の育成などについて紹介していった。その後実施したアンケートの結果（グラフ⑤）を見ると、提供した情報を受け止め、それぞれの課題、特に家庭での時間の使い方や生き方について話題とし、関心を高めてもらうことに役立ったと言える。 <グラフ⑤>



(3) 研究仮説ウについて

学習集団として見た時、勉強の意欲、勉強の計画、授業の受け方など学習態度については改善が見られた。（グラフ⑥：3年の例）また学習集団適応にも改善が見られたことから、生徒一人一人の学ぶ姿勢は高まったと考える。しかし、生徒の意識は、表②：学習評価指標c（「学習集団協同についての自己評価」）に示したようにあまり変容が見られず、学び合うことの楽しさやよさを実感していないことがわかる。今後は、生徒が他者を意識しながら学習を進められるように、日々の学習の中で以下のことに取り組む必要があると考える。

- ・生徒の発言や活動をより一層生かした授業展開をする。
- ・生徒同士が教え合ったり、互いの学習を評価したりする場を設ける。
- ・課題別グループ等小集団の編成に当たって十分な工夫と配慮をする。



[学習評価指標c]

<表②>

	1	2	3	4	5
1 学期	3.1	2.5	2.8	2.6	3.1
2 学期	3.0	2.5	2.8	2.5	3.2

[学習評価指標c]

評価指針の観点	質問項目
1 学習の構えづくり	授業開始前には、学習に取り組むための心の準備ができていたと思いますか。
2 自他の考えの理解・尊重	自分の考えを進んで言ったり、他人の考えをよく聞いて意見・質問したりできたと思いますか。
3 集団での協同的活動ルール履行	未発言の人に発言機会を譲ったり、集団活動で協力したりするなど、支え合うことができたと思いますか。
4 集団での学習相互支援	集団の中で、学習を進める発言や学習を評価する発言ができたと思いますか。
5 感動・喜び・楽しさの共有	学習での驚嘆・困難等の感想や理解・達成の喜びを友達と共有して、楽しく学習できたと思いますか。

学校名：江津市立跡市小学校

所在地：江津市跡市町 632

HP：http://www.atoichi-1873@iwamicatv.jp

学校規模：3学級 24名

(確かな学力育成のための実践研究事業)

1 研究の概要

(1)研究のテーマ

「自ら学び、自分の可能性を伸ばそうとする子どもをめざして」～小規模複式校のよさを生かした読解力を高める指導を通して～

(2)テーマ設定の理由

- ①学力調査結果より、十分な学力が定着していないことが明らかになり、学校の特色を生かした授業改善の必要性がある。
- ②文部科学省の「読解力向上プログラム」を受け、本校児童についても読解力の育成が必要である。
- ③本校児童の生活習慣の実態調査から、学力向上の手だての一つとして、生活習慣の改善が挙げられる。

(3)研究の目標

子ども自らの目標の達成と自らの知識と可能性の発達をめざし、学ぶ意欲と基礎・基本を大切にしながら読解力を高める授業の在り方について、個に応じた達成目標を明確にしなが、確かな学力を定着させるための具体的な手だてを組み入れた教育実践を行い、その手だての効果を明らかにする。

(4)研究の視点

- 〈視点1〉読解力を伸ばすための複式のよさを生かした個に応じた指導方法にはどのようなものがあるか。
- 〈視点2〉個々の課題に向かって取り組む学力の定着を図る指導方法にはどのようなものがあるか。
- 〈視点3〉学びに集中できる環境づくりとして、望ましい生活習慣の形成を図るにはどのような手だてがあるか。

(5)研究の内容

視点1	・個人データファイルの作成による個別の課題把握と適切な指導 ・授業改善による数学的な考え方・表現力の育成 ・ガイド学習の導入による主体的な学びの促進 ・学習の見通しと評価による意欲の向上
視点2	・集合学習の充実による意欲の向上と個に応じた指導の充実 ・学びタイムによる基礎・基本の一層の定着 ・読書活動の充実による読解力向上
視点3	・正しい生活習慣に関する知識の伝達と情報交換 ・家庭の時間割の作成と実施による生活リズムの向上

(6) 評価計画・研究成果の検証

- ①学力調査、学習適応性検査結果の数値化による比較

②学校保健委員会によるライフスタイルアンケート結果の数値化による比較

③各単元のテスト結果の数値化による比較

④児童の自己評価(レーダーチャート等)、教師の見取りによる評価 等

2 研究の実際

(事例1)

ガイド学習を取り入れた主体的な学びの環境づくりと読解力に視点を当てた授業の改善および個人データファイルの作成

算数科における「わり」による授業において、ガイド学習を取り入れ、学習や解決の見通しを持たせながら、場の設定や発問の工夫によって主体的な学びと読解力及び表現力を伸ばす指導を行った。

3・4年「一人一人が考える時間と表現する場を設けた取組」		
単元名	3年「3けたの数の計算を考えよう」(本時3/8)	4年「変わり方を見やすく表そう」(本時3/8)
目標	筆算形式による3位数の加減計算の仕方について理解し、それを用いる能力を高める。	伴って変わる2つの数量の変化のようすを折れ線グラフに表したり、その特徴を読み取ったりする能力を高める。
意欲と数学的な考え方を養う学習活動の設定	レストランの接客係となり、会計伝票に筆算を書き込み、意欲的に計算の仕方を考える。	1年の気温の変化を折れ線グラフに表し、東京とシドニーで比較して話し合う。
数学的な考え方および表現力の育成のための支援	・前時に既習の2けたの筆算を思い出させておくとともに、掲示しておく。 ・お金の模型を用意して、必要とする児童には具体物を操作しながら考えることができるようにする。 ・一人一人に考える時間を与え、発表用の用紙に書かせる。 ・一人一人に考えたことを説明させる。 ・自分で答え合わせができるようレジスターを準備し、進んで練習問題に取り組ませる。	・前時でかいた東京のグラフからのよい読み取り方を紹介し、掲示しておく。 ・実際にグラフをかき、違いを体感させる。 ・一人一人が考える時間をとり、発表用の用紙に書かせる。 ・一人一人に考えたことを説明させる。
学習の見通しと評価	目標シートを提示して、単元を見通すオリエンテーションの時間を取るとともに、毎時間の振り返りを記入させる。	
成果と課題	・場の設定により意欲的に計算をしようという様子が見られた。 ・既習の2けたの筆算が定着しており、3けたも同様に考えることが容易にできた。 ・メニューの作り方を工夫すれば、もっと読解力を伸ばすよい教材となった。	・折れ線グラフに関心を持ち、意欲的にグラフをかこうとしていた。 ・グラフをかきながら、グラフの特徴をとらえることができた。 ・シドニーのグラフから「雪がふることはないなあ。」と読み取る児童がいてよかった。 ・東京とシドニーのグラフを一人一人比べると成長が見られる。

また、授業の中で評価した読解力のデータとこれまで行ってきた学力調査および学習適応性検査を学年・個人ごとにまとめ、傾向と対策を考える資料とした。さらに、ライフスタイルアンケートの結果を合わせ、個の学習状況と適応性、生活習慣の相関関係を分析している。今後は、ここで明らかになった個の課題を指導者が意識しつつ、授業に生かしていきたいと考えている。

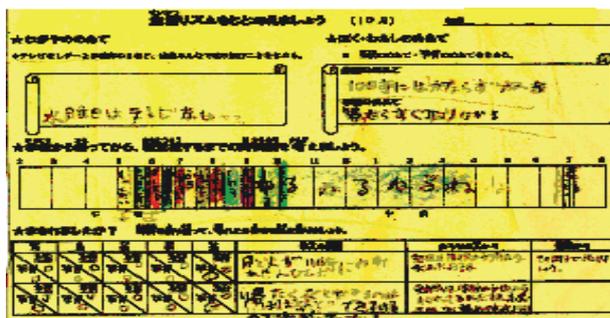
抽出児の傾向(11月現在)

A 児	
読解力	課題把握:課題の意味をよくつかみ、解決の見通しをもつことができる。 追求:いろいろな方法を試し、課題を解決することができる。 表現:自分の思いを相手にわかりやすく話すことが苦手である。
TK式 (学力調査)	国語(関・意、知・理) 算数(関・意、考) 国語・算数とも関心・意欲が満足できる数値であり、また、数学的な考え方ができるようになってきた。 言語事項や数量関係において復習が必要である。
AAI (学習適応性検査)	現状・問題点と対策 【現・問】 ・適応性は普通の程度であるが、学習に対する要求水準が高く、自分の力をより高めようという意欲がある。 ・本の読み方、ノートのとりの技術が未熟である。 【対策】 ・学習に必要な技術を指導するとともに計画的に学習する習慣をつけさせ、意欲を持たせる。
ライフスタイルアンケート	朝ごはん 毎朝食べているが、主食のみ摂っており、内容が偏っている。 テレビ・ゲーム 前も今もテレビとゲームを合わせて3時間くらい使っている 睡眠時間 前も今も9時間くらいで十分取っているが、寝起きがすっきりしていない。

(事例2)

学校保健委員会とPTAと連携した望ましい生活習慣の形成を図ることについて

学校保健委員会を中心として、まず、児童および家庭に生活習慣アンケートを実施し、その結果のまとめをもとに、学校保健委員会をはじめ、学級活動やPTA研修会等で現状と課題を話し合った。昨年度の夏休みには、①就寝時間を決める。できるだけ10時までは寝る。②何か、家の仕事を受け持ってやりぬく。③テレビ・ゲームの時間を2時間程度におさえる。という3点を共通のめあてとして取り組んだ。また、今年度は、夏休み・冬休みの長期休業中はもちろん、普段の生活においても、家族で話し合って作成した生活表に従って目標を決めて取り組んでいる。さらに、この取り組みの成果をまとめ、参観日などの機会をとらえ、PTAにも情報を提供して生活習慣の改善を呼びかけている。



3 研究の成果と課題

(1) 読解力の育成について

学力調査からは、まだ全体としての伸びは見られていない。しかしながら、ガイド学習が定着しつつあり、児童が主体的に学習を進める場面が多く見られるようになった。また、十分な個人思考の時間を取ることで、一人一人の思考におけるつまづきを教師が把握することができ、支援の方法について考える場となった。

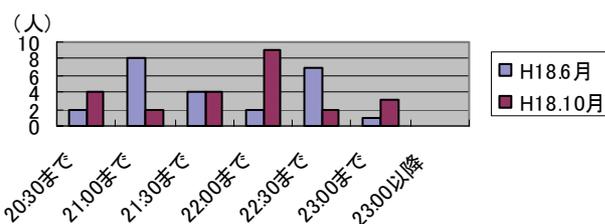
今後の課題としては、どのようにして全体の前で自分の考えをわかりやすく表現させるかということである。説明で使う図や具体物、手順、言葉を場に応じて自分で選び、組み立てていく力を身につける指導方法を考えていきたい。

(2) 望ましい生活習慣の形成について

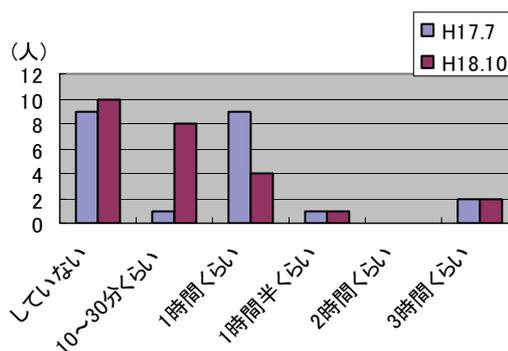
生活習慣アンケートの結果から、以下の成果が見られた。

調査項目	前回調査	今回調査
10時までにはねる	67%(H18.6)	79%(H18.10)
8~9時間の睡眠時間をとる	42%(H18.6)	67%(H18.10)
テレビ視聴を2時間までにする	61%(H17.7)	67%(H18.10)
ゲームの時間を0~30分にする	45%(H17.7)	72%(H18.10)

昨日は何時ごろに寝ましたか(全校)



昨日学校から帰ってテレビゲームをどのくらいしましたか。(全校)



その他の項目では、朝食はきちんと摂っているが、バランスの悪い家庭が半数程度ある。起床時刻と食事の内容に関係があるかと考えたが、早い遅いによって食べたものの種類に差は見られなかった。

以上のことから、望ましい生活習慣は形成されつつあるが、まだ十分と言えるものではなく、児童・保護者の意識の変容があまり見られない部分もまだある。今後の課題は、児童及び各家庭へどのような働きかけが有効であるのかを検証していきたい。

教育委員会名：安来市教育委員会

学 校 名：安来市立広瀬小学校

委員会所在地：安来市伯太町東母里580

学校所在地：安来市広瀬町広瀬751

図書館ネットワークHP：<http://www.city.yasugi.shimane.jp/>
より 教育・学校・育児を選択→安来市学校図書館ネットワークを選択

学校規模：広瀬小学校14学級 284名

(学校図書館資源共有ネットワーク推進事業)

1 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

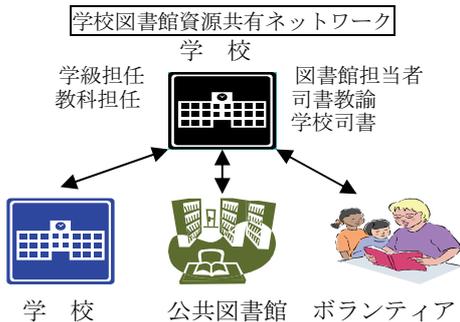
「学校図書館活性化による知育・徳育」

(学校図書館の資料を進んで活用し学習や生活に生かすとともに、読書の楽しさを味わわせ、進んで読書しようとする態度を育てる取組)

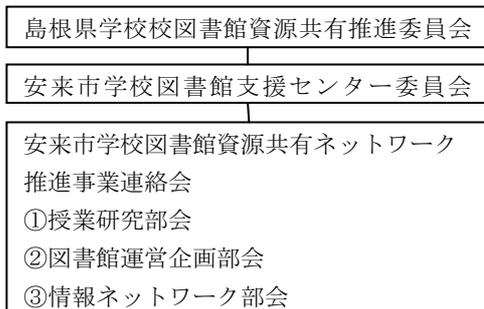
②研究のねらい

安来市内の学校図書館(22館)と公共図書館(3館)や学校司書及び読み聞かせボランティア団体等との間に物的・人的ネットワークを構築することにより、学校図書館の機能を強化・充実する。

その図書館を活用し、より豊かな教育活動を展開することによって、児童生徒の豊かな感性を育み、多様で豊かな学びを支援する方策を探る。



(2) 研究組織・体制



(3) 研究内容

①学校図書館の諸活動を支援する学校図書館支援センター機能に関する調査研究

②優れた実践事例集の収集、情報提供の在り方に関する調査研究

③学校図書館活用のための体制、教職員等の資質向上に関する調査研究

2 研究の実際

(1) 学校図書館の諸活動を支援する学校図書館支援センター機能に関すること

- ・安来市学校図書館支援センター委員会の設置
- ・学校司書を7校に配置し、学校司書連絡会設置
- ・市内25校の蔵書12万冊のデータベース化
- ・市内22校にパソコン図書管理システム配置
- ・学校間蔵書検索ネットワーク整備



(図書管理システムによる貸出)

(2) 優れた実践事例集の収集、情報提供の在り方に関すること

- ・「図書館活用授業」実践事例集の作成
- ・安来市ホームページに「授業研究部会」で作成した学習に役立つ図書リストを掲載
- ・「図書館活用事例集(国語編)」作成・活用
- ・安来市のホームページに実践を随時掲載
- ・研究発表会の開催

(3) 学校図書館活用のための体制、教職員等の資質向上に関すること

- ・司書教諭、図書館担当者、学校司書、ボランティア団体とのネットワーク作り
- ・資源共有ネットワーク利用研修
- ・教職員研修会の実施(講演会6回実施)
- ・図書館レイアウト、ブックトークの実践研修
- ・公共図書館や読み聞かせボランティアとの連携による読書推進活動

3 広瀬小学校の実践事例

<読書指導—本を読む力をつけるため>

児童が進んで読書をするよう、環境整備をはじめとして全教職員で運営する読書集会や読み聞かせ、ブックトークなど様々な方法で意欲付けをしている。

○ 進んで本を読もうとする児童を育てる

- ・行きたくするような図書館づくり
- ・読書集会、図書館まつり、おはなし会
- ・図書コーナーや図書館だよりでの情報発信
- ・学習にあわせたブックトークや読み聞かせ
- ・個に応じたレファレンス
- ・読書へのアニメーション

<年間貸出冊数>

年度	貸出冊数	児童一人当たり	備考
H14	4,992	17.6	司書教諭発令
H15	11,811	39.6	学校司書配置
H16	12,179	41.2	
H17	11,388	40.5	4.5月閉館
H18	13,924	49.0	1月10日現在

- 質の高い読書をめざす
 - ・必読図書の選定，読書カードの作成
 - ・読書へのアニメーション
 - ・ブックウォーク

【事例①】『本はともだち』（必読図書）

図書館の環境整備や読書集会などによって，児童への貸し出し冊数は伸び，読書を楽しむ児童が増えてきた。読書量が増えるだけでなく，学年に応じた本を選んで読める力をつけて欲しいという願いから，必読図書の選定を行った。

図書担当者だけでなく担任（図書館部員）と一緒に，各学年の発達段階や興味，能力，学習内容を考慮して必読図書を選定。併せて，読書カードを作成したり必読図書コーナーを作ったりした。（各学年 30～70 冊，6～8 コース）「図書の時間」を使って本の紹介をしたり各コースの終了者を掲示したりして，意欲を継続させている。

<利用指導—情報活用能力を身につけるため>

本校では、『読書センター』としてだけではなく、『学習・情報センター』として授業でも学校図書館を積極的に利用している。

○ 図書館整備

- ・機能的な図書館づくり
（「おはなしスペース」「資料スペース」「学習スペース」）



- ・郷土資料の収集と整理
- ・調べ学習に使える資料の充実
- ・分類別の資料整理，掲示の工夫

○ 利用指導の位置付け

- ・「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」の作成
- ・「学び方指導計画（国・社・理）」の作成
- ・担任，司書教諭，学校司書による T T 授業
- ・図書館クイズ
- ・安来市学校図書館ネットワーク作成「図書館活用事例集」の活用

○ 図書館を使った授業数の増加

<図書館を使った授業数>

年度	授業時数	開館日数
H15	306時間	173日
H16	667時間	168日
H17	378時間	134日

<備考> H17 年度は同時に図書館を使えるクラスを制限し，図書資料を学級へ持って行って利用することにしたため，授業時数が減っている。

- ・1 年国語「どうぶつ赤ちゃん」（大事なところを抜き書きする）
- ・2 年特活「レッツゴー図書館たんけん」（図書館の配架，分類を知る）

- ・3 年理科「虫のからだ調べ」（資料の選び方，図鑑・百科事典の使い方）
- ・4 年社会「わたしたちの島根県」（情報カードを使って情報を収集・分類する）
- ・5 年理科「天気図を調べよう」（資料の探し方，インターネットの使い方，天気図の見方）
- ・6 年総合「山中鹿之助を知ろう」（郷土コーナーの使い方，インタビューの仕方）

【事例②】5 年「工業生産と貿易」（資料の選び方，年鑑の使い方，情報カードの使い方）

「どの原料をどのくらいどの国から輸入しているのか」を調べる活動で，司書教諭から「どんな資料を使って調べられるか，どの資料が適しているか」「年鑑の特長や使い方」を説明した後，個別での調べ学習をする。担任，司書教諭，学校司書による T T 授業だったので，資料が探せない子，資料が読み取れない子など個別の問題に対応できた。



【事例③】『図書館クイズ』

資料を探したり図鑑や辞典を使ったりする力を高めるには，ある程度の訓練が必要とされる。楽しみながら力をつけていけるよう，全教職員で『図書館クイズ』を作成した。



初めはなかなか調べられなかったが，回を重ねていくうちに早く調べられるようになってきた。また，自分の力で調べる力もついてきていると感じた。

【事例④】『図書館活用事例集（国語）』を活用した授業

自校の資料だけでは少ない場合でも公共図書館から借りてくることができ，意欲的に調べ学習に取り組む児童の姿が多く見られた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①読書を楽しみ進んで読書する子が増加した。
児童・生徒の年間貸出図書冊数の変化（25 校平均）
16 年度 19.7 冊 17 年度 18.7 冊 18 年度 27.6 冊
（18 年度は，2 学期末までの実績を基にした推計）
- ②図書館資源共有ネットワークを活用し多様で豊かな教育活動が実践できた。
 - ・図書資料を活用した調べ学習や発展読書
 - ・ボランティアによる読み聞かせ
- ③読書の質が高まり，情報活用力が向上した。

(2) 課題

- ①学校司書配置校と未配置校の格差是正
- ②読書力の向上が学力向上に結びつく客観的データの長期的収集

学校名：海士町立福井小学校
所在地：隠岐郡海士町福井412
 HP：http://www.town.ama.shimane.jp/fukui_es/index.htm
学校規模：7学級 66名

1 研究の概要

(1) 研究のテーマ

互いのよさを認め合い

いきいきと表現する児童の育成

(2) 研究の目的

国語科における「読むこと」、学級活動における「学級生活の充実・向上」の学習を通して、自ら問題（疑問）をもち、生き生きと表現する児童の育成を目指す。

①国語科

- ア 課題設定の仕方について
 - 学習問題の作成（個人的なレベル）
 - 学習課題の設定（学級全体のレベル）
- イ 評価について
 - 単元計画及び目標分析表の作成
 - 具体的な児童の言動で表した「評価規準」の設定

②学級活動

- ア 議題設定の仕方について
 - 学期ごとに学級集団づくりのテーマを設定
 - 議題選定のポイントの作成
- イ 自己評価、相互評価の工夫
 - 変容に気づく振り返り
 - 次の学習や生活に生かす振り返り

③表現力の向上を図る取り組み

- ア あとどフェスティバル
- イ チャレンジ創作
- ウ 全校集会

④他機関との連携

町教委、家庭、小・中の連携

2 研究の実際

(1) 平成15・16年度の取組より

学力向上フロンティア事業の指定を受け、算数科で『個に応じた指導の充実』を図ってきた。

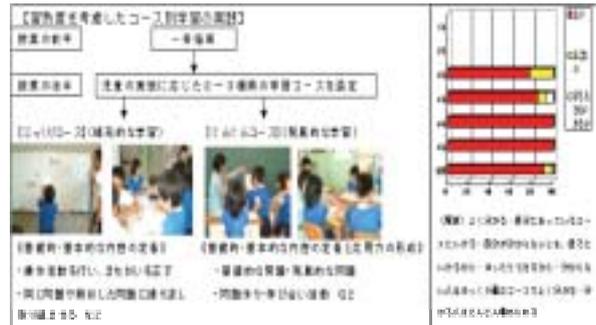
- ① 全学年の算数科において、1単元で2～3種類の学習の手引きを作成した。

(6年生「平均」の単元より)



それぞれが自分のペースで自力解決へと向かい、一人一人に充実感や成就感を味わわせることができた。また、それぞれのコースで問題を多くこなすことで習熟が図られた。

②単元に応じてTT指導や習熟度別学習を取り入れた学習形態の工夫。



自分に合ったコースでじっくりと問題に取り組み、わかることに喜びを感じ、意欲的に学習に取り組むようになってきた。

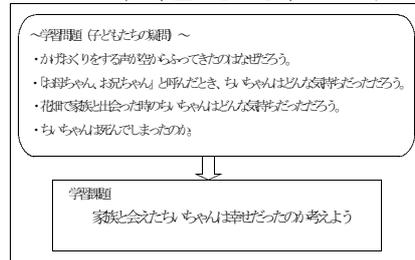
(2) 平成17・18年度の取組より

学力向上フロンティア事業の取組では、個に応じたきめ細かな指導の充実が図られた。しかし、学習が個別化されてしまい、授業の中で友達と学び合い、高め合う力を育成する点において課題を残した。そこで、国語科と学級活動を中心として、児童の「学習意欲の向上」と「表現力の育成」を目指し、研究を進めた。

①国語科

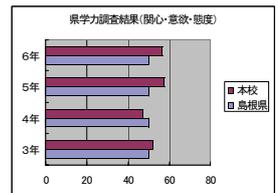
教材文から疑問を学習問題として引き出す。その中からより深めて学習したいものを話し合い、学習課題として設定した。

(3年生「ちいちゃんのかげおくり」4場面より)



自分たちが作った学習課題が高い意識が、意欲的に自分の考えを発表することができた。

島根県学力調査結果で、国語科における関心・意欲・態度の観点で県を上回り、意欲面での向上が図られた結果となった。(右グラフ)



②学級活動

何でも言い合える支持的な風土の学級集団をつくるのが、表現力の育成へとつながると考え、学期に一回イベント活動を実施した。学級集団づくりのテーマを学期ごとに設定し、下の図のように、合計3時間扱いで学習に取り組んだ。(3年生2学期の取組より)

学習時間	学習内容	学習成果
1時間	「ちいちゃんのかげおくり」の4場面を読み、疑問をもち、学習問題を作成する。	学習問題の作成が完了し、話し合いの場を設けた。
2時間	学習問題について話し合い、学習課題を設定する。	学習課題が設定され、学習意欲が高まった。
3時間	学習課題に取り組む。	学習課題が完了し、表現力が向上した。

学級集団づくりのテーマを「チャレンジする学級」と定め、議題選定のポイントを下

記の通りに定めて話し合わせた。

- ・みんなが満足感を味わえそうな議題か
- ・みんなで助け合えばできそうな議題か
- ・今までにやったことのない議題か

議題選定のポイントに沿って話し合わせることで、現在の学級を振り返り、よりよい学級集団の姿を思い浮かべながら意欲的に意見の交流ができた。

③表現力の向上を図る取組

ア あとどフェスティバル

ふるさと教育の一環として、総合的な学習の時間に自然や文化、人とかわる学習活動を展開した。今年度より、学習の成果発表の場として開催し、表現力の向上を図った。



イ チャレンジ創作

学期ごとに、作文や詩、短歌・俳句の中からジャンルを一つ選び、書く活動に取り組んだ。各学級の代表者が全校集会で発表した。

④他機関との連携

ア 町教委の方針

「海士の子はみな我がとこの子」という視点に立ち、保・小・中・高の連携を深めながら、ふるさとに根ざす子どもの育成を図る。

町教委主催の事業としては

- ・赴任者研修
- ・交流事業
- ・学校連絡会・・・など

イ 家庭との連携

児童が主体的に学び、確かな学力を身に付けるため、学校と家庭が協力し『学習のやくそく』を作成した。

ウ. 小・中の連携

学び方の定着を図ることを目的として、町教職員会の教務部会を中心に「学習規律基準表」を作成した。町内の児童生徒に共通した学習規律の指標を提示することで、担任が入れ替わっても、中学へ入学しても、戸惑うことなく、より高い成長をめざしていけるように、小・中3校が連携して取り組んでいる。

3. 成果と今後の課題

(1) 成果

- ①進んで考えを発言できるようになってきた。
- ②発言の仕方が身に付き、話し合いに深まりが出てきた。

上の表は、本校の学習規律基準表の取組における自己評価の一覧で、「話すこと」に関する項目は約75%の児童が肯定的に回答している。「大きな声」「最後まではっきり」「友達の意見と関連づけながら」「根拠を明確にして」など、相手に分かりやすく表現していく力が育ってきている。

(2) 今後の課題

- ①児童朝礼やあとどフェスティバルなど、どのような場においても堂々と表現していけるように、さらに研究を進めていく必要がある。
- ②他校や家庭との連携をさらに深めながら、学び方の定着を図っていく必要がある。

学校名：安来市立赤江小学校
 所在地：安来市赤江町 1 8 4 3
 学校規模：1 4 学級 2 5 4 名
 (国語力向上モデル事業)

1 研究の概要

(1) 研究のテーマ

自分の思いを生き生きと表現し、
 ともに高め合う児童の育成
 ～国語科における「読むこと」の
 学習を通して～

(2) はじめに

本校では、平成15年度から4年計画で、「児童の表現力を高める」ことをねらい、「自分の思いを生き生きと表現し、ともに高め合う児童の育成」を研究テーマに掲げ、国語科の「読むこと」の学習における話し合い活動の中で、指導・支援の在り方を探ってきた。そして、平成17年度から18年度にかけては、国語力向上モデル事業推進校の文部科学省指定も受けて、研究実践を行った。

(3) 研究の目標

「自力読みの力」の高まり、「表現する力」の高まり、「伝え合う力」の高まりをめざした指導・支援の在り方を実践的に明らかにする。

(4) 研究内容

① 研究内容 1

- ア 国語科における支援の在り方の工夫。
 「身につけさせたい言語活動の力」を明確化し、6年間を通して国語力の向上をめざす。
- イ 「自力読みの力」を明確化し、文章を自らの力で読み進める「方法」を獲得させることを主眼に、授業実践を重ねる。
- ウ 年間指導計画には、単元で育てたい「自力読みの力」を明示し、「身につけさせたい言語活動の力」をもとにして評価規準を設定する。
- エ 単元全体を貫くエネルギーを醸成するための課題設定を工夫する。(ゴール設定型学習)
- オ 発達段階に応じた話し合い活動の系統を明確化する。(ペア対話・グループ対話等)
- ② 研究内容 2
 国語科・他教科・授業以外での取組の工夫。
- カ 音読、名詩文の暗誦や朗誦、百人一首等、人前で声を出す経験を増やす。
- キ 「全校集会、異学年交流年間計画」に基づいて全校あるいは異学年との交流の中で、音読発表や詩の暗誦発表会を計画的に実施する。
- ク 音声言語表現「語り」を全学年で取り入れ、伝え合う力を養っていく。
- ケ 学校図書館を活用して、読書指導を強化する。

2 研究の実際

(1) 「身につけさせたい言語活動の力」の明確化

次の3項目について、具体的にどんな姿が見られたら、児童に、それぞれの力が身

に付いたと言えるのかを、低・中・高学年ごとに考察し、一覧表にまとめた。(以下の表は、全てその一部)

- ・他者とのかかわり(話す・聞く力、書く力)
- ・言葉とのかかわり(書く力、読む力)
- ・基礎的言語事項

この表をもとに、実態把握、評価規準作成及び評価を行う。

身につけさせたい言語活動の力

I 他者とのかかわり

1・2年	
・相手の顔を見ながら話を聞く。	
・手を止めて、最後まで話を聞く。	
・うなずいたり、笑ったり、相手の話の内容に反応しながら話を聞く。	
・聞いた話を自分の言葉でくり返す。(単語、短い内容のものについて)	
・順序に気をつけながら聞く。	
・途中で口をはさまずに、最後まで相手の話を聞く。	
・聞いて分からなかったことを聞き返す。	

II 言葉とのかかわり

1・2年	
・動植物を擬人化したり、身近なもの・人を登場させたりして、登場人物を設定する。	
・簡単な場面の設定や時の設定をして、文章を書く。	
・一つの出来事をもとに短い文章を書く。	
・いくつかの出来事を羅列した短い文章を書く。	
・時間的な順序を意識して文章を書く。	

(2) 自力読みの観点の明確化

教師の発問によって教材文を読解する学習から、児童が、自らの力で文章を読み深めていく学習へと発展させていきたいと考えている。そのための指標として「自力読みの観点」を定めた。これらは、そのすべての観点を1つの単元で学習するわけではない。教材文の特性に合わせて、6年間をかけて徐々に身に付けさせたいと考えている。

児童は、まず、発達段階に応じた「自力読みの観点」を使って、自分の力で文章を読み進めていく。次に、その読み取ったことを学級全体で交流することで自分の読みを確かめ豊かにしていくような学習過程をとるようにしている。

文学的文章「自力読み」の観点

		「自力読み」の観点		低	中	高
客観的な読み	A	①	物語の始まり(冒頭)を把握する。	○	○	○
		②	事件の始まり(発端)を把握する。	○	○	○
		③	事件の重要な部分の始まり(山場の始まり)を把握する。		○	○
		④	事件が最も盛り上がる所(クライマックス)を把握する。		○	○
		⑤	事件の終わり(終末)を把握する。	○	○	○
		⑥	物語の終わり(終わり)を把握する。	○	○	○
		⑦	冒頭場面・出来事の場面・クライマックス場面・その後場面(基本4場面)を把握する。		○	○
		⑧	構造曲線(クライマックスを頂点とした1本の曲線)で書き表す。			○
		⑨	事件を短い文章【4文以内】でまとめる。	○	○	○
主観的な読み	B	①	題名の意味を検討する。【主題(作品の心)との関連】			○
		②	核となる言葉を指摘する。(作品の最も重要な一文)		○	○
		③	周辺の言葉(作品の重要な一文)を複数指摘し、核となる言葉に関連付ける。			○
		④	主題(作品の心)を自分の言葉で短く表現する。(読み手である自分に最も強く語りかけてきたこと)			○
		⑤	作品との対話として、感想を短い文章で表現する。	○	○	○

説明的文章「自力読み」の観点

		「自力読み」の観点			
		低	中	高	
I 客 観 的 な 読 み	A こ と と が 読 み	① 題名を手がかりに書かれている事柄をつかむ。	○		
		② 順序を追いかけてながら読む。	○		
		③ 写真や図を手がかりにして内容をとらえる。	○		
		④ 筆者が言いたいことをとらえる。(筆者の主張)		○	○
		⑤ 各段落の要点をつかむ。		○	○
		⑥ 意味のまとまりごとに小見出しをつける。		○	○
		⑦ 文章を要約する。			○
		⑧ 要旨をとらえる。			○
II 主 観 的 な 読 み	A こ と と が 読 み	① 知っていたこと、知らなかったこと。	○	○	○
		② おもしろかったこと、おどろいたこと。	○	○	○
		③ もっと知りたいこと。	○	○	○
		④ 筆者はなぜこの問題を取り上げたのか。		○	○
		⑤ 文章を読んで学んだこと。		○	○
		⑥ 文章の意図や表現に対して、意見や批判をもって読む。			○

(3) 「ゴール設定型学習」の取組

児童が、「読み」の学習を進めていく際に、この学習は何のためにするのか、その必然性を学習者である児童自らが自覚することが非常に重要である。そこで、この学習の中で、児童がどのような言語的活動を行うのか、つまり、紙芝居や劇など何かを作り上げたり、発表会や交流会をしたりするような、学習の到達点を教師と児童が一緒になって設定することとした。このような課題を設定する学習方法をも、本校では、「ゴール設定型学習」と呼ぶことにした。

「ゴール設定型」学習の一覧表 No.6

学年	6 年 年	
一 学 期	単元名	1年生・6年生に読書紹介をしよう
	教材名	森へ・本は友達
二 学 期	単元名	「立松和平の世界」～立松和平さんに読み取ったことを伝えよう～
	教材名	海の命・『いのち』絵本シリーズ』5作品
	主な学習事項	○立松和平さんに読み取ったことを伝えるという単元のゴールに向けて、『いのち』をテーマとした連作作品を自力で意欲的に読み進めたり、作品のテーマを伝えるために読みを進めようとしたりする態度を育てる。(関心・意欲・態度) ○自力読みの観点を駆使しながら、登場人物の心情や場面についての描写など、優れた描写を味わいながら読み、作品のテーマについて自分の考えを持つことができるようにする。(読むことウ) ○自分の読み取ったことが聞く人に伝わるように音声表現(語り)を工夫することができるようになる。(読むことウ) ○文章を繰り返し読んだり、優れた表現を抜き出したりすることを通して、語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心を持つことができるようにする。(言語事項ウ2)
	主な学習活動	1. 『海の命』の「作品の心(テーマ)」について、お互いの読みを交流する。 2. 『いのち』絵本シリーズ(『山のいのち』『田んぼのいのち』『川のいのち』『街のいのち』『木のいのち』)5作品の「作品の心(テーマ)」を読み取る。 3. 『海の命』も含めた六つの作品の「作品の心(テーマ)」について、お互いの読みを交流する。(読むことウ) 4. 立松和平さんに読み取ったことを伝えるための方法を考え、書き表す。
自力読みの観点	文I A④③ I B①～④ II①～⑤	
三 学 期	単元名	「宮沢賢治の世界」発表会をしよう
	教材名	やまなし・イーハトーブの夢

3 授業実践および全校の取組

(1) 第6学年の授業実践

① 単元名

「立松和平の世界」～立松和平さんに読み取ったことを伝えよう～

② 主な学習活動

- 「海の命」の主題について、お互いの読みを交流する。
- 5作品の主題を読み取る。
- 「海のいのち」も含めた6作品の主題について、お互いの読みを交流する。
- 立松和平さんに読み取ったことを伝えるための方法を考え、書き表す。

③ 主な教師の指導と支援

- 立松和平さんに読み取ったことを伝えるという単元のゴールを設定する。
- 「核となる言葉」「周辺の言葉」「クライマックス」「題名の意味」「核となるもの・こと・存在」との関連で主題を読み取らせる。
- 同一作家の『いのち』絵本シリーズ』

を発展教材として取り上げ、「いのち」という言葉に着目しながら、重ね読みする学習を展開する。

- 自力読みによって創造した個人の読み取りを他者に伝え、交流する場を設定する。
- 「伝え合う力」を養っていくために、「語り」と「ペア対話」を多く取り入れる。
- 立松和平の作品に親しむ環境を設定する。

④ 本時の概要

本時では、まず数名の児童による数音声言語表現活動「語り」で、教室全体が本作品の世界に浸った中で学習が進められた。そして、初発の感想交流の中から出てきた読みの課題について、話し合いが行われた。話し合いでは、クエと他の5作品の「核となる存在」とを関連させて、自分の考えを出し合った。各自が読み取ったことを交流することで、それぞれの読み取りがさらに深まり、話し合いが広がっていった。



話し合いが広がっていった。話し合いでは、クエと他の5作品の「核となる存在」とを関連させて、自分の考えを出し合った。各自が読み取ったことを交流することで、それぞれの読み取りがさらに深まり、話し合いが広がっていった。

(2) 表現力を高める日常の取組1 声の広場

全校児童が毎学期集い、国語科で学習した物語の語り、百人一首、俳句、詩の暗誦発表等を行った。日頃の練習の成果を出し合い、達成感を感じたりさらに表現したいという意欲を高めたりすることができた。

(3) 表現力を高める日常の取組2 異学年交流

異学年との交流の中で、音読発表や詩の暗誦を計画的に実施し、伝え合う力を養っていくことをねらいとしている。例えば、3・5年の交流では、3年生が『モチモチの木』、5年生が『大造じいさんとがん』の語りを行った。3年生は、アドバイスや感想をもらうことによって語りのポイントを学ぶことができた。5年生は、下級生の頑張り認めたり、アドバイスを与えたりすることによって、達成感や自己有用感も味わうことができた。

4 研究の成果と課題

(1) 「身に付けさせたい言語活動の力」の明確化

- 児童の変容を、曖昧な印象としてではなく行動目標として捉えられるようになった。

(2) 「自力読みの観点」の明確化

- 「教材文を読み取る」から、「読み取っていく方法を身に付けさせる」に、指導観を転換。
- 発達段階に合わせて、学習技能の系統性を意識して指導できるようになった。
- 発言内容の質が、印象によるものだけでなく、叙述を基にした豊かなものになってきた。
- 自分の力で文章を読むことができたという自覚を持てるような工夫の必要性。

(3) 「ゴール設定型学習」の取組

- 児童が目的意識や必要感をもって学習に取り組み、学習意欲の高まりが見られた。
- 児童が達成感をもって学習を終えることができるようになった。

(4) 「お互いの思いを交流する場」の設定

- 自力読みの場、ペア対話、全体での話し合いという学習の流れをつくることができた。

※参考文献：『夢の国語創造記』仁瓶弘行著 2006 東洋館出版社

学校名：益田市立匹見小学校

所在地：益田市匹見町匹見イ 1 3 2 4

HP：<http://www.town.hikimi.shimane.jp/hikimi.js/index.htm>

学校規模：7学級 52名

(学力向上パイオニアスクール事業)

1 研究の概要

(1) 研究のテーマ

「確かな学力の向上をめざして」

～個に応じた指導を通して分かる喜びを実感できる授業の推進～

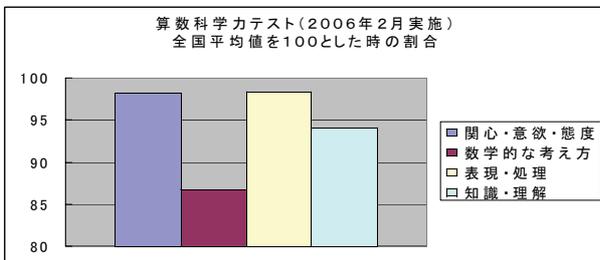
(2) 主題設定の理由

本校は、一昨年度までの学力向上フロンティア事業、昨年度の算数科授業の研究推進を通して、「確かな学力」を育てる研究を進めてきた。今年度は、さらに特別支援教育の充実を図り、個に応じた指導を通して、より「分かる喜び」を感じられるような授業の推進を図っていきたいと考えた。こうした授業を実践することによって、「学びたいという意欲」が高まり、「確かな学力」が育つものと考えられる。

(3) 児童の実態

本校は1学級の児童数が10名前後の少人数規模校である。学力向上フロンティア事業の成果として、表現・処理や知識・理解の面で成果が見られたほか、学習意欲の向上が図られた。しかし、学力にはかなりの個人差が見られ、特に高学年になるほどその格差が広がる傾向にある。観察や意識調査の結果から、高学年になるほど学習内容が多様化することで、算数に対する苦手意識や抵抗感が増していることが大きな原因になっていると考えられる。

また、昨年度行われた校内の学力テストや今年度実施した学力調査の結果から、計算など表現・処理の観点では、一定の成果が見られたものの、数学的な考え方の観点ではまだまだ不十分であることが明らかになった。



(4) 仮説

個に応じた指導を通して分かる喜びを実感させれば、学びへの意欲が育ち、確かな学力向上を図れるであろう。

(5) 研究の内容

① 発展的な学習や補足的な学習など個に応じた指導のための学習教材の工夫

- ・児童にとって身近で、親しみがあり、意欲的に課題を追求しようとすると思われるもの
- ・理解不十分な児童にとって、学習内容の理解を助け、分かる喜びをつかむことのできるもの

② 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善

- ・授業において、個に応じた支援(補足的指導・発展的指導など)を位置づけて展開を考えること。
- ・子ども同士のかかわりを重視し、みんなが分かってよかったと思える雰囲気をつくり出すような学習形態や手だてを工夫すること。
- ・単元全体の指導計画や1単位時間の授業展開の基本パターンに沿って行い、学力テストの結果や、授業での評価を生かし、個の習熟を図るための時間を位置付けること。

③ 児童の学習評価の工夫

- ・自己評価を取り入れた授業を行うこと
- ・各単元の終わりに、学習に対する理解度・友だちとのかかわり・学習の進み方などを振り返ることのできる評価を取り入れること

(6) 研究の評価

- ・学力テストの結果
- ・各単元終了後の振り返りシート
- ・行動観察、作文・日記、ノート

2 研究の実際

(1) 発展的な学習や補足的な学習など、個に応じた指導のための学習教材の工夫

○児童が意欲的に課題を追求していくために、単元を構成するにあたり、ゲームを取り入れたり、単元全体を通して課題を持ち続けられる題材を取り入れたりしている。

○2年生『1000までの数』では、導入時において「いくつももらえるかなカードめぐりゲーム」を、確かな理解を深める段階では「数字カルタ」



を、終末では大きな数に対し実感を伴った理解ができるよう、「1000人の顔を集めよう」という活動を取り入れた。

○知的障害特殊学級『わりざん名人になろう』で、

お楽しみ会の中で使うお菓子の量をわりざんを使って求めるようにした。また、わりざんルーレットを用い単純な計算練習にならないよう工夫した。繰り返しの中にも楽しみながらできることや、見通しを持ちながらでき、実生活に活用できる活動であった。○算数コーナーの設置のねらいは、児童が実際に手にとって数や形などに触れる機会を多くすることで算数に対する経験知を増やすこと、操作を通し実感を伴って理解できるようにすること、授業の中でいろいろな方法を試しながら自分の力で解決できることなどである。また、備品を設置するだけでなく、授業で使ったヒントカードなども置き、新しい単元の時に応用したり活用したりできるようにしている。休み時間になるとコーナーの周りに自然に児童が集まる姿が見られ、算数に対する興味・関心の深まりがうかがえる。



(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善

○個に応じた支援や、子ども同士の関わりを増やしながら、数学的な考え方を深めるために、個、ペア、グループ、集団の形態をどの場面に用いるかを考え、授業の展開を考えている。

○5年『小数の計算の仕方を考えよう』では、小数の仕組みをペア学習で話し合い、考えの交流を図った。そのことで、自他の考えの同異が見つかったり、友達に説明したりすることで、自分の考えを確かめたり深めたりすることができた。

○本校では、自分の考えを友だちに分かりやすく伝える手段の一つとして、ワークボードを使用している。ワークボードを用いることにより、式化のみならず、図や表なども用いながら考えることができるので、式化が難しい児童も「～までは分かるけど」と自分の考え方の説明ができたり、「～さんのこのところはよく分からない」と、友だちの考えをもとに深めたりしやすくなっている。このワークボードは、磁石つきで表がホワイトボード、裏が黒板になっている。考えを書くのみにかわらず、黒板に貼って、学級全体に自分の考えを発表する際にも便利である。



(3) 児童の学習評価の工夫

各時間にノートなどに簡単な自己評価を書くようにしたり、単元末に振り返りシートによる児童の自己評価を取り入れたりしている。児童自身の振り返り



りや次への意欲につながるだけではなく、教師の指導の改善にも役立っている。

3 研究の成果と課題

算数に対する抵抗感の軽減については、次のような成果や課題が明らかになった。

○算数的活動の積極的な導入や算数コーナーを設置したことで、算数に対する興味関心が高まった。

○自分ができない時に、試行錯誤するための方法に気付かせることで意欲を持続させる必要がある。数学的な考え方の育成については、次のような成果や課題が明らかになった。

○多様な話し合いの場の設定やワークボードの活用により、自分の考えがもてるようになった。

○友達に自分の考えを分かってもらおうとする意欲が高まった。

○考えの比較検討により、それぞれの考え方のよさに気付いたり、友達の考えを生かして答えを求めたりするなど学び合いのある授業をつくっていく必要がある。

以上のような成果と課題を検証するために、児童の自己評価や学力テストの結果の比較検討分析を考えている。

学校名：松江市立大谷小学校
 所在地：松江市玉湯町大谷 299番地
 HP：http://www.town.tamayu.shimane.jp/odanisho/index.htm
 学校規模：3学級 21名
 (確かな学力育成のための実践研究事業)

1 研究の概要

自分の思いをもち、人と関わりながら、
 豊かに表現する子どもの育成
 ～伝え合おう、互いの考えを。音声言語を中心にして～

(1) 研究のねらい

本校では、「発言の声が小さい」「発言内容や表現の仕方に広がりがない」「話し合いが深まらず、集団による高め合いに至らない」といった児童の実態から本研究主題を設定した。これにより、国語科における「話す力」「聞く力」の育成に視点を当て、児童の表現力を育てるとともに、伝え合いを通して共に高め合う学習集団づくりをめざしている。

また、平成17年度より「確かな学力育成のための実践研究事業」の指定を受けている。これは、地域の実情や課題に即して「確かな学力」の育成と定着を図ることを目的としたもので、玉湯町内3校で連携しながら取り組んでいる。本校としては、これまで取り組んできた「話す力」「聞く力」の育成を進めることが、学力の向上にもつながると考えている。それは、どの教科においても思考を深めたり、課題を解決したりするためには、話したり聞いたり、話し合ったりという活動が欠かせないからである。よって、この「話す力」「聞く力」を育成することにより、「自分たちで話し合い、課題解決ができる」「互いの考えを聞く中で思考力、ものの見方・考え方・感じ方が深まる」「しっかり聞くことで理解力がつき、知識が増える」「集団の一員として、協調性や思いやりの心をはぐくみ、人間力

が高まる」など、効果は大きいものと期待する。

以上のことから、国語科で身に付けた「話す力」「聞く力」を他教科等においてどう活用していくのか、その活用効果を検討していくことが、本校の考える学力向上につながるものと考えている。また、確かな学力は基礎学力や基本的な生活習慣などの基盤があってこそ確立するものと考え、そうした基盤づくりも重視している。

(2) 研究の内容

前述のねらいに向けて、「話す力」「聞く力」の育成に視点を当てた授業づくり、その基盤となる基礎学力づくり、生活の基盤づくりという3本柱で取り組んでいる。 *下図参照

(3) 評価計画

小規模校という本校の特性を生かし、児童一人ひとりの実態や変容を見取り、評価していきたいと考えている。

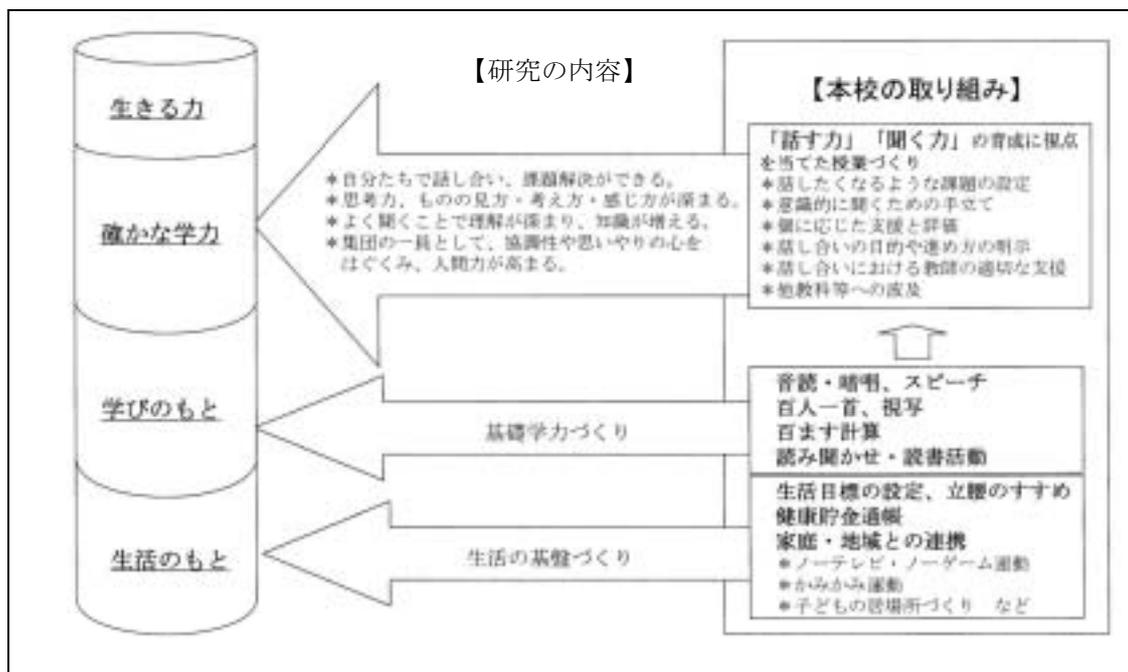
- ①児童、保護者の意識調査
- ②授業分析、仮説の検証
- ③「話す力」「聞く力」にかかわる個人カルテの作成
- ④市学力調査(平成17年度)
県学力調査(平成18年度)

2 研究の実際

(1) 「話す力」「聞く力」に視点を当てた授業づくり

【国語科を中心とした授業づくりの視点】

- ①話したくなるような課題を設定する。
- ②意識的に聞くための手立てを講じる。
- ③話し合いの目的や進め方を明確にし、教師が適切な支援を行う。
- ④一人ひとりを評価し、指導や支援に生かす。



①②について

第3・4学年 国語科「伝言はまちがえずに」

題材となる伝言を架空のものではなく、図工の準備物や水泳の連絡など実際の生活にかかわる内容にすることで、児童に必要感をもたせた。また、自分たちの話し方・聞き方について振り返って話し合うようにし、児童の気付きから正しく伝え合うための工夫や大事なことがおさえられるようにした。

③について

第1・2学年 国語科「じどう車くらべ」

はしご車の「しごと」と「つくり」について見付けたことを短冊に書いて発表させることで、出てきた事柄を分類したり、関連を考えたりしながら話し合いが進められるようにした。また、この短冊の並べ替えによって文章構成をつかませ、書くための手だてとしても活用した。

第5・6学年 国語科「大造じいさんとガン」

初発の感想をもとに児童と一緒に学習課題を設定し、目的意識をもたせた。そして、課題解決に向けた話し合いにおいても、読みが深まるような支援に努めた。例えば、「音読を繰り返すことで言葉に着目させる」「大造じいさん・残雪・ハヤブサ・おとりのガンの位置関係をはっきりさせる」「ガンとハヤブサの体の違いが分かるような資料を用意する」などである。これらは、児童に新たな視点に気付かせるきっかけとなり、読みを深めることにつながった。

④について

学年に応じて「育てたい力」を設定し、それをもとに一人ひとりの実現状況を見取っていった。担任の目を中心となるが、集会などを活用して多くの教職員が加わるように工夫している。また、これらの評価をもとに教職員間で話し合い、指導にも生かせるように努めている。

(2) 基礎学力づくり

音読・暗唱

朝の時間や国語の時間を利用して、「今月の詩」をはじめとした詩の音読や暗唱を行った。また、立腰を取り入れることで、集中力も高めている。立腰とは森信三先生が提唱された立腰教育から学んだもので、立腰をすることで主体性が育つと言われている。立腰とは腰骨を立てて姿勢を直すことである。

スピーチ集会

月に1回全校集会を開き、スピーチや音読・暗唱、「話す力」「聞く力」を高めるゲームを行った。お互いの発表について感想を交流したり、上級生をモデルとして示したりするなど、全校で行うよさが生きるように努めている。

百人一首

全校で百人一首に取り組み、定期的に大会を開いて練習の成果を競い合った。毎回、対戦の勝敗によって席順を移動させることで、意欲や目標がもてるように工夫している。



【スピーチ集会の様子】



【百人一首大会の様子】

読み聞かせ・読書活動

ボランティアによる読み聞かせや朝読書、委員会による読書推進活動を行った。しおりの配布、読書集会、読書郵便など、全校を巻き込んだ活動を定期的に設けている。

(3) 生活の基盤づくり

健康貯金通帳

睡眠・食事・運動といった基本的な生活習慣にかかわる項目について、児童が日々の生活を振り返り、自己評価を行った。ポイント制にして意欲を高めるとともに、自分の課題が見付けられるようにしている。また、養護教諭との面談を設けることで、一人ひとりに応じた支援を行っている。

ノーテレビ・ノーゲーム運動

「学校懇談会による保護者との話し合い」「講演会の開催」「チェックカードの活用」「ゲーム脳についての授業」など、保護者と連携しながら視聴時間の短縮に取り組んだ。チェックカードには保護者と一緒に目標を立てさせることで家族を巻き込んで取り組めるようにしている。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- 発音や発声がよくなり、人前でも自信をもって発表するようになった。
- 紋切り型の発言が減り、つまりながらも自分の言葉で話そうとするようになった。
- 異学年による学習ということもあり、互いの考えを聞き合うことで、話し合いによる思考の深まりが見られるようになった。
- 学習意欲や集中力の向上、基本的な生活習慣にかかわる意識の高まりが見られた。

(2) 課題

- 教師が間に入って話し合いを進めている段階なので、もっと児童同士のやり取りが増えるように工夫してい
- 個人カルテを効果的に活用し、個に応じた指導・支援をしていく。
- 国語科で身に付けた「話す力」「聞く力」を他教科等にどのように生かしていくのか、他教科等との関連表をもとに計画的に実践していく。
- 家庭との連携を深め、さらに基本的な生活習慣をはじめとした基盤づくりを進めていく。

学校名：奥出雲町立横田小学校

所在地：仁多郡奥出雲町横田1025-1

HP：http://www.town.yokota.shimane.jp/yokosho/

学校規模： 8学級 169名

(児童生徒の心に響く道徳教育推進事業)
(学力向上サポート事業)

1 研究の概要

(1) 研究主題

豊かな心に支えられた確かな学力の定着を図る指導のあり方

(2) 研究内容

- ・総合単元的道徳学習の実践や命を大切にしている体験活動等を通して豊かな道徳性の育成を図る。
- ・少人数指導や学力向上サポート事業等の個に応じた指導の充実により基礎学力の定着を図る。

(3) 研究の基盤となる教育活動

- ・自己肯定感とコミュニケーション能力の育成
- ・指導方法の工夫改善
- ・家庭学習習慣の定着や基本的生活習慣の確立
- ・継続的な体力づくりによる心身の健康
- ・相互参観授業、評価シートなどによる教員の指導力向上

(4) 評価方法

- ・道徳的意識の高まり(道徳ノート、ハートカード)
- ・命を大切にしている体験活動(交流記録、ハートカード)
- ・基礎学力の定着(単元テスト、行動記録)
- ・基盤活動(自己評価、保護者アンケート)

2 研究の実際

(1) 道徳教育の実践について

平成17年度島根県道徳教育研究大会発表
平成17・18年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業指定

研究主題

豊かな心をもち、共に生きる横田の子を育てる道徳教育
—命を大切にしている学習活動を通して—

- ①生命そのものの大切さを、「ひと」「もの」「こと」と関わったり体験(直接・間接)したりして、より実感的にとらえること。
- ②自分を大切に、ひとを大切にすること。

①道徳授業を通して

- 主体的に学ぼうとする子どもを育てる。
(考える、伝え合う、聴き合う、深め合う)
- ア 認め合える集団づくり(学習規律、小集団の活用等)
- イ 心に響く資料や展開の工夫(問題追求的な展開等)
問題追求的な展開とは、資料提示後、自分たちがその時間に話し合いたいこと、追求したいことを自分たちで設定し、グループや全体で話し合う中で、価値の自覚を深めてよりよい生き方を考えていく展開である。教師は、話し合いを整理し、児童の主体的な話し合いを支援していく。

②体験活動を通して

- コミュニケーション能力、自己肯定感を高め、自他を大切にしている子どもを育てる。
(学級で学び、集団で育て、地域で試す人間関係づくり)
- ア 学級づくり(前述)
- イ なかよし班(縦割り班)活動の充実
なかよし班活動は、前後期2期制の全校縦割り班活動、それぞれ、気付きの段階、認め合いの段階、高め合いの段階を設け、児童が相互にかかわり合う場を意図的に設定することで、相互の人間関係を醸成していく。
- ウ 人・交流学習の取組

【概要】

各学年ごとに交流の対象を決め、地域の様々な人と系統的、継続的、個別的に交流を図ることにより

コミュニケーション能力を伸ばし、自己肯定感を高め、自他を大切にしている豊かな心を育てる。

【内容】

a 人間関係の基礎を学ぶ

コミュニケーションゲームや気付きの体験学習を通して、クラスの仲間とかがわり、仲間との緊張感を減らし、人とかかわる楽しさを体感する。また、グループや集団の中での望ましいかかわり方を学ぶ。

b 人間関係の応用を学ぶ

いろいろな人々との交流をしていく中で前述 a で学んだこと(そばにいる人から喜ばれ、役に立ったという役立ち感)を実感する。そして、自己肯定し自分の存在に自信を持ち、他人を思いやる心をもつことができる。

c 「交流の振り返り」の重視

・児童の気付きを大切に、一人一人のよさを見つける。
・振り返りシートを工夫し、年間を通しての児童の変容、成長がわかるような記録を取り、保存する。

【取組の成果】

(第6学年)

- ・第5学年で幼稚園、本学年で保育所との交流をしているため、幼児への接し方がスムーズになってきた。異年齢の相手に対しても自分から積極的にコミュニケーションをとろうとする態度が培われつつある。
- ・1対1に近い状態で回数を重ねて交流しているため、ペアの相手との結び付きが強くなってきた。交流の回数を増すにしたがって、自分が相手に必要とされていると実感でき、自己肯定感が高まってきている。保育所との交流を終えて帰ってきた児童の顔はとても穏やかで、落ち着いている。
- ・学校では気付かなかった友だちのよいところを見つけたり、自分の新しい面に気付いたりすることができた。



②家庭・地域との連携を通して

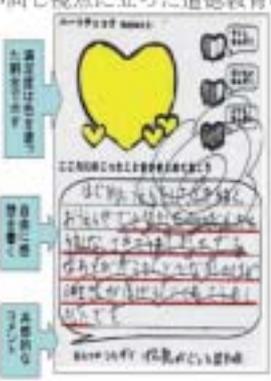
- 「学校」「家庭」「地域」が同じ視点に立った道徳教育の推進。

ア 啓発活動(道徳の時間や学校行事の公開、道徳便り、学校便り、学級便り等)

イ 連携活動(地域講師による全校集会や道徳の時間のG.T、PTA活動等)

「命」をテーマにした地域講師による全校集会を計画的に実施(平成17年度は9回、18年度は4回実施)

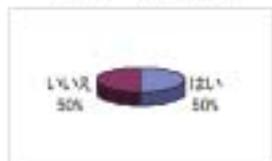
例「命の始まり」(助産師)



ハートカード例(自己評価)

④成果

- ・道徳アンケート、「あなたは、自分のことが好きですか。」の質問に対して、自己肯定感の高まりが見られる。
6年生 (5年時) (6年時)



・自分の思いをしっかりと表現しようとするともに、相手の気持ちや考えもしっかりと考えることにより、互いを尊重していこうとする心情が育ってきて、人間関係の改善が見られた。また、自己肯定感が高まると、よりよい自分でありたいと思う気持ちが芽生え、学習や生活により積極的に取り組む姿が見られるようになった。

(2) 個に応じた指導による基礎学力の定着について

16・17年度：文科省の学力向上支援事業
18年度：県事業の学力向上サポート事業

①事業の実践

ア 目的

学力調査によって明確になった課題を踏まえ、サポーターと教員の連携により、放課後算数教室（補充学習）やTT学習を行い、基礎学力の定着をめざす。

イ 実施期日・方法

月曜日（4～6年）、火曜日（2, 3年）の算数授業と放課後指導とし、学力向上サポーターは、昨年度から引き続いての2人に本年度からの1名の3名体制で行う。

ウ 内容

16・17年度の2ヵ年、週1回のTT指導や放課後学習相談（算数）によりつまずきのある児童をいち早く発見し、個別指導による基礎・基本の定着を図った。意欲や関心が高まる児童が増え、保護者からも事業継続を望む声が多数あり、その成果を挙げた。

平成18年度は、担任とサポーターの「連絡表」による指導連携を一層密にするとともに、家庭学習の習慣化を図るなどの基盤整備に取り組み、支援体制を整えた。

また、TTによる指導については、サポーターが、T2（T3）として授業に参画し、学習状況を把握し、放課後の指導を効果的に実施している。

授業中の個別指導やTT指導、放課後算数教室を定期的計画的に学習することは、信頼関係も深まり児童・サポーターの両者にとって効果的である。

エ 学力向上サポート事業の取組から

【放課後算数教室の実践例】

- ・3年生の例：1, 2年生の問題をウォーミングアップとして挑戦させ、意欲を高める手だてを工夫している。
- ・4年生の例：授業では除法の解答間違いの原因は減法の未習熟によるものが多かった。そこで算数教室において減法のプリントによる計算力の習熟をねらうなどの取組により、基礎学力の定着を図った。

【児童アンケートから】

- 参加してよかったこと
 - ・楽しいし、算数がとてもよく分かる。
 - ・自信がもてるようになった。
- 参加していやだったこと
 - ・友だちと遊べない。
 - ・家に帰るのが遅くなる。
- サポーターの先生にお願いしたいこと
 - ・算数が分かるようになったからもっと教えてほしい。
 - ・終わる時間をもっと長く（短く）してほしい。

*双方の意見あり

【保護者アンケートから】

- 放課後算数教室に参加し、感じられること
 - ・本人からの「楽しい」「分かった」などの声がうれしい。今は「算数が好き」と言っている。（2年生）
 - ・算数だけでなく、ある程度全般の教科を家の方でもするようになった気がする。（5年生）
 - これからの放課後算数教室への希望
 - ・これからも続けてほしい。（多数）
 - ・日が短い時期は、時間を短くするとかして欲しい。
- 【児童の変化 サポーターとの打ち合わせから】
- ・事業開始の2学期初めと学期末とでは、子どもたちの学習へ取り組む様子が変わって来た。
 - ・連絡表による個別のきめ細かな対応等により、11月中旬頃からは、わからない時はサポーターによく声をかけたり、積極的に大きな声で発言したりするなど、授業に意欲的に取り組むようになった。

②成果と課題

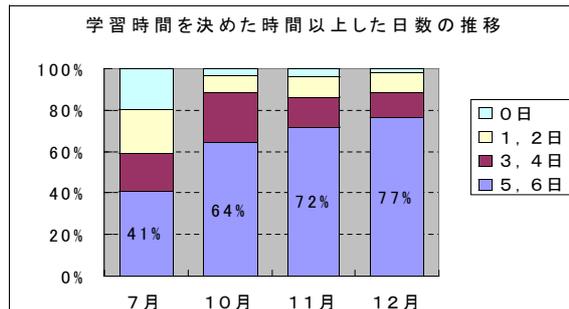
基礎・基本の定着と学習上のつまずきの解消、学習意欲を高めるための学年の発達に応じた指導の在り方を試行錯誤しながら進めてきた。

ア 成果

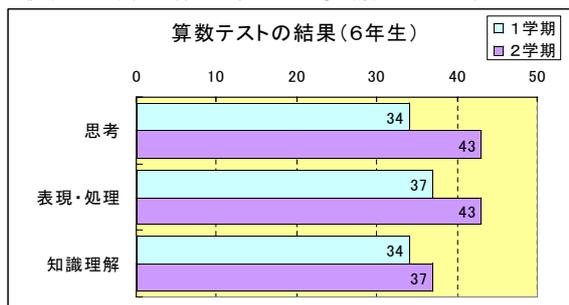
- ・自ら進んで放課後算数教室に参加する児童が増えた。特に4年、5年生は自主的に参加し、意欲が高まり、算数が好きになり楽しくなったという児童が多くなる。
- ・基礎学力定着の基盤となる生活習慣の改善や教員の指導力向上を図る取組を事業と併せて実施し効果を上げた。

次に挙げたのは、その効果の一例である。

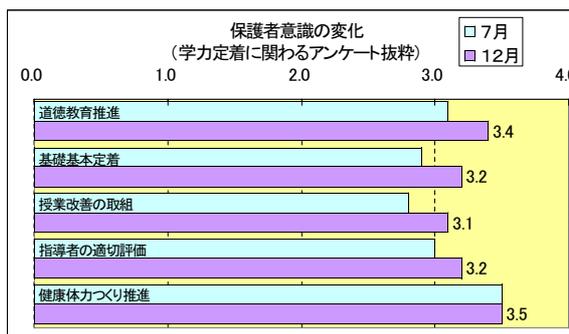
- ・生活習慣改善の取組とタイアップし、事業実施後に家庭学習が定着した児童が多い。



・放課後教室は、担任(担当)とサポーターの複数で行う。つまずいている児童により素早く丁寧に対応し、基礎・基本の定着ができる。算数科における1, 2学期の成績を比較すると下記の伸びが見られた。(観点別50点)



・保護者アンケートの結果（4点満点）を見ると、事業による効果を保護者も感じている。



イ 課題

- ・自分で放課後算数教室に参加の有無を判断する力をつけることが必要である。自分での判断が意欲につながる。
- ・一人一人にあった補充学習ができるようになるため、サポーターとの連携を密にすることが必要である。
- ・算数教室の人数は7, 8人までが適当である。しかし、日によっては多くなり過ぎて、個別指導が必要な児童に対応できない場面があり、今後の課題となった。
- ・評価を工夫し、力がついたことや伸びたことを児童に知らせ、頑張っていることを認めていきたい。

3 研究の成果と課題

- (1) 道徳教育を重点に置いて取り組んできたことにより、自己肯定感や集団への所属意識の高揚が見られるようになって、自分の存在（命）を見つめる意識が育ちつつある。
- (2) 少人数授業等きめ細かな指導や2年間の学力向上支援事業から学力向上サポート事業を中核として、基盤となる活動（生活習慣改善、指導力向上など）に全校体制で取り組むことにより、学力定着がみられた。
- (3) 基本的な生活習慣や生活リズムの改善への取組により、主体的な健康生活づくりへの意識が高まりつつある。
- (4) 確かな学力の定着を図るためには、それを可能にし、よりよいものにしていくために、体力・健康づくりと心の豊かさを培うことが肝要である。そのことが生きる力の育成につながると考えられる。特に、道徳性を育てていくことは、自他を大切に、よりよい自分を求めて生きるために、知識を獲得する力や活用するための良識、適切な判断力などを育てる上で、重要なことであると考える。

学校名：飯南町立赤来中学校

所在地：飯石郡飯南町下赤名 1 9 3 8

HP:http://www.town.akagi.shimane.jp/akagichu/

学校規模： 4 学級 9 9 名

(中高一貫教育改善・充実事業)

1 研究の概要

(1) 研究の経緯

H10～18年度：県立飯南高等学校との中高一貫教育推進校指定。
(頓原中学校との三校による連携型中高一貫教育)

H14～16年度：学力向上フロンティアスクール研究指定。
(「学力向上レインボープラン」をキャッチフレーズとした実践。)

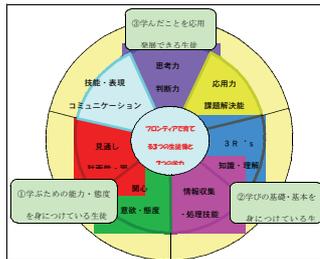
H18～19年度：県学校図書館教育研究大会発表校としての実践。

(2) 研究のテーマ (H 18 年度)

生きる力をはぐくむ確かな学力の育成
～学ぶ意欲を高め、
主体的な学習を創造する図書館活用の工夫～

(3) めざす生徒像

確かな学力を身につけている生徒についてKJ法を用いて校内で検討した。右図に示した7つの学力をもった3つの生徒像として具体化し、その育成に向けて教育活動全体を通して取り組んでいる。



(4) 研究の重点

教師の観察やCRT, レインボーチャート等から生徒の実態を分析した。その結果, 「3R's 知識・理解」「思考力・判断力」「表現・技能・コミュニケーション」「応用力・課題解決能力」等の弱さが目立った。そこで, これまでの指導の在り方を再考し, 以下を重点として実践することとした。

- ア 個に応じた教育課程の工夫改善
- イ 個に応じた学習課題や教材の開発
- ウ 実態に応じるための指導方法・指導体制の工夫

- ・英語, 数学における習熟度別授業
- ・中高教員によるTT指導や少人数指導
- エ 生徒の学力評価を生かした指導の改善
- ・個の課題と目標がわかる学習評価システム「レインボーチャート」の活用
- オ 学校図書館を活用した授業の展開

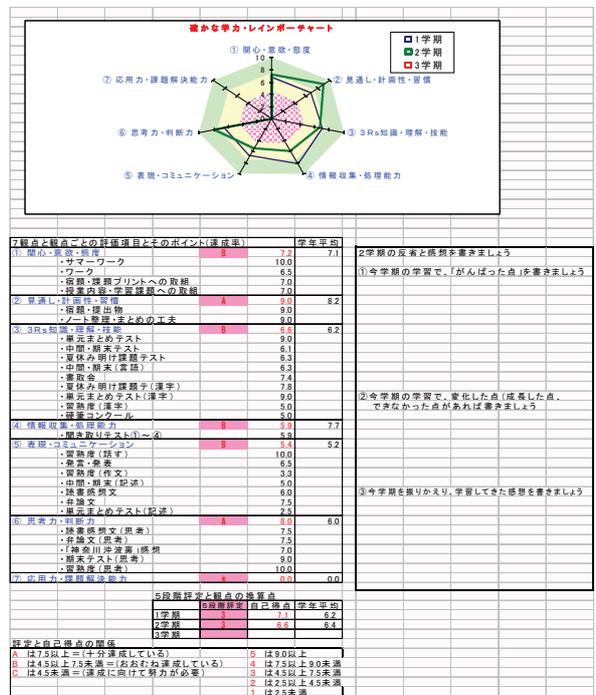
- ・情報活用能力, 読解力の育成を重点とした授業の展開 (全教科等)
- カ その他の取組

- ・長期休業中の補充教室, 自学教室の開設等

2 研究の実際

(1) 生徒の学力評価を生かした指導の改善～学習評価システム「レインボーチャート」～

①生徒一人一人の学力を的確にとらえ, 教師の指導や生徒自身の学習に生かすことのできる評価の工夫が必要だと考えた。そこで, 本校がめざす7つの学力の観点ごとに到達状況をレーダーチャートで表す評価システムのソフトを開発した。(以下, レインボーチャートと呼ぶ。)
②レインボーチャートには, 7つの学力の観点ごとに評価資料や評価事項, 評価結果, 学期末評定, 評価基準等を表示している。各自の学力実態を視覚的に示すことにより, 生徒保護者に対して何を努力すればよいか, めざす力は何かということ教師と共有できるようにした。生徒・保護者に対しては, 適宜ガイダンスや説明を行った。
③各教科のレインボーチャートは, 生徒各自のファイルに綴じ, ポートフォリオ評価ができるようにした。



④レインボーチャートを活用して生徒が自分のよさや課題を発見し, 効果的な学習方法を身につけていくことをねらいとして学習カウンセリングを行った。

⑤教師はレインボーチャートなどをもとにして学期ごとに指導内容や指導方法等を振り返り, 次学期の指導の工夫改善を行う。(指導と評価の一体化)

(2) 学校図書館の効果的な活用に向けた取組

① 全校朝読書

平成 10 年度から朝読書に取り組んでいる。朝礼前の 10 分間, 生徒も教師も一緒に本の世界に浸る。今年度はさらに落ち着いた雰囲気読書できるように, 朝礼と朝読書の時間を入れ替えるなど生活時程を改めた。

- ② 学校図書館機能の充実
 ア 第1図書館（読書センター）と第2図書館（学習情報センター）とを設置し、環境整備に努めた。
 イ 図書館のデータベース化を進めている。管理面のみならず、図書館利用の促進、情報活用能力の育成、読書指導への有効利用が主なねらいである。将来的には町内の小中学校も含めた図書館資源共有のネットワークづくりをめざしている。
 ウ 良質な図書を選定に努め、図書館の利用促進を図る。選定にあたっては生徒の意向も十分に取り入れる。また、授業内容を踏まえて各教科担当者が図書の選定を行うなど、全教職員が図書館運営に関われるように努める。このことは学習指導や読書指導を行う際にも効果を発揮すると考える。

- ③ 学校図書館を活用した授業の展開
 本校生徒の弱みである「3Rs知識・理解」「思考力・判断力」「表現・技能・コミュニケーション力」「応用力・課題解決能力」の育成をめざして、全教科等において学校図書館を活用した授業を実施している。授業にあたっては生徒一人一人が主体的に学習に取り組み、他者と関わりながら互いの思考を高めていけるような学習課題の工夫に努めている。

情報活用能力については、教科の特性に応じたものと、全教科等を通じて指導すべきものとを洗い出し、計画的系統的に指導できるように年間計画等の整備を進めている。

- ④ 家庭との連携
 通知票、学校だより、学校評価等の活用。

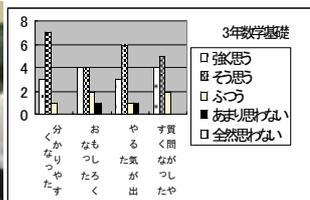
(3) 個の実態に応じるための指導方法・体制の工夫～中高教員が連携した学習指導～

- ① 授業交流の取組（H18年度）
 必修教科、選択教科でのTT指導。

教科	飯南高校から赤来中学校へ
数学	中3：週2時間 中2：週2時間（2名の高校教員）
英語	中3：週2時間 中2：週2時間（2名の高校教員）
国語	中3：週1時間（1名の高校教員）
理科	中3：2・3学期に高校教員による授業（実験など）
社会	中3：2学期に公開授業
体育	2学期：柔道 3学期：スキー

* 中学校の数学・英語は習熟度別授業

教科	赤来中学校から飯南高校へ
数学	高1（習熟度別授業）：週1回 （各教科1名の中学教員）
英語	
国語	



TT指導について、中学生の感想には、次のような前向きな記述が多く見られるようになった。



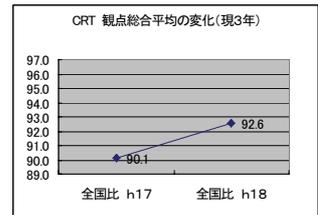
- ・学習への抵抗感が薄れた。興味が出てきた。
- ・勉強すればできるようになると分かった。
- ・基本的なことができるようになってうれしい。
- ・質問しやすかった。

- ② 授業以外での取組
- [数学]・・・○長期休業中の共通課題、課題テストの実施。
 ○中学生対象の夏・冬休み勉強会の実施。
- [英語]・・・○三校合同英語検定
 ○夏休み補充学習会
- [国語]・・・三校合同漢字検定 など。
- [その他]・・・
 ○三校合同夏季勉強合宿（3日間）
 ○中高6年間を見通した指導計画の作成。
 （国社数理英について作成中）

- ③ その他の取組
- ・三校合同職員会での教科部会。
 - ・「スタディサポート」分析会での中高教員による情報交換。

3 研究の成果と課題

近年実施してきた学力検査の結果から見れば、本校生徒の学力は少しずつではあるが向上してきている。



- (1) レインボーチャートは生徒が自分の学習状況を考えるのに有効であった。何をどのくらい頑張ればよいのかが分かるため目標を具体的に設定しやすく、それが次への学習意欲につながった。

教師は個や学習集団の特色をとらえることができるようになり、指導や評価の在り方を振り返ることができた。保護者も、子どもとの話し合いや家庭教育の見直しの材料にするなど、多方面に効果を及ぼすことができた。今後は評価方法や評価資料の検討、指導の改善をさらに進めていくことが課題である。

- (2) 学校図書館教育においては、学習情報センターとしての機能の充実が急務である。生徒会活動との連携、外部人材の活用などにも力を入れていかねばならない。

- (3) 中高教員が連携して指導することで、より個に応じた指導が可能になった。生徒の疑問や学習のつまづきにその場で対応でき、実態に応じた多様な学習活動が展開できるようになった。中高6年間を見通しながら現在の指導内容を検討できる点、教材研究や指導法等について切磋琢磨できる点でも効果的である。課題としては中高教員それぞれの特性を生かした効果的なTT指導の工夫が挙げられる。6年間を見通した指導計画の整備や育てたい力の更なる焦点化も課題である。

学校名：隠岐の島町立西郷中学校
 所在地：隠岐郡隠岐の島町栄町 488 番地
 HP：http://fish.miracle.ne.jp/saichu/
 学校規模： 7 学級 186 名
 (確かな学力育成のための実践研究事業)

1 研究の概要

(1) 研究のテーマ

豊かな心を育み、自ら学び、自ら行動しようとする生徒の育成
 ～確かな学力の育成をめざして～

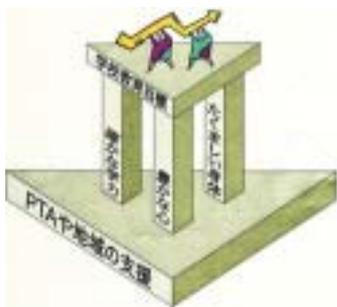
(2) 研究仮説

教科等において、指導方法を工夫改善し「分かる喜び」のある授業を行えば、基礎学力の定着に効果があるであろう。また、様々な教育活動において、人とのかかわりの中で自分の考えを深く練り、それを表現する場を設ければ、豊かな表現力が育成され、それが思考力や探求力、課題解決力の向上を促し、基礎学力の定着と相まって、確かな学力の育成につながるであろう。

(3) 「確かな学力」の育成に対する基本的な考え方

この研究はあくまで学校教育目標の具現化のためであり、「智・徳・体」の全人的な教育をめざすものである。学力検査の点数を上げることだけに固執せず、様々な側面から確かな学力の育成に迫りたい。

また「表現力」は、本来「確かな学力」の一要素としてとらえられるものであるが、本校では、表現力の育成が思考力や探求力、課題解決力、意欲や向上心の伸長に波及すると考え、指導の重点課題として取り上げた。



(4) 主な研究内容

- ①基礎学力の定着をめざす取組
 - ・習熟度別学習等の少人数指導の工夫
 - ・ICTを活用した指導方法の改善と教材開発
 - ・個々のつまずきの把握 (学習診断カルテ:計画中)
- ②豊かな表現力を育成する取組
 - ・総合的な学習の時間における表現活動の工夫
 - ・学習形態の工夫とグループでの共同作業
 - ・学校行事、生徒会活動等における表現活動の重視
 - ・表現力育成重点単元の設定
- ③望ましい集団づくり、家庭・地域との連携の取組
 - ・教育相談ウィーク
 - ・ストレスマネジメントの導入
 - ・道徳ウィーク、人権週間の取組
 - ・学校評議員制度、地域に開く参観日の実施 等

(5) 検証方法

- ①基礎学力定着の検証
 - ア 学習内容の定着
 - ・島根県学力調査及びCRT 学力検査
 - ・観点別評価の変化 等
 - イ 学習意欲の向上
 - ・生徒による授業評価
 - ・生徒アンケート 等
- ②豊かな表現力育成の検証
 - ア 教科における表現力
 - ・授業観察と発言の流れ図による授業研究
 - ・生徒アンケート
 - イ 生活全般における表現力
 - ・各種行事の評価
- ③望ましい集団づくり、家庭・地域との連携の検証
 - ・生徒アンケート
 - ・学校評議員会での評価
 - ・学校評価アンケート

2 研究の実際

(1) 基礎学力定着の取組の事例

①英語科における指導形態と指導方法の工夫改善

ア 指導形態の工夫

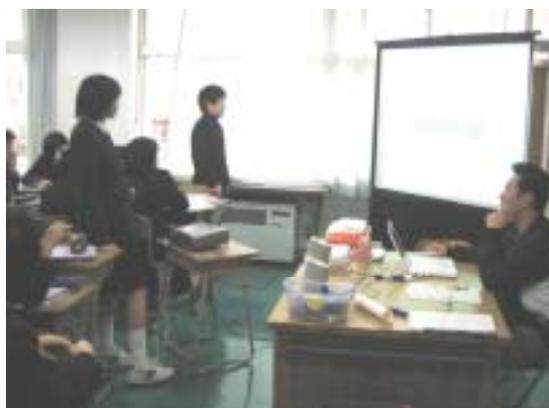
英語科では、習熟度別学習を取り入れた少人数学級によるきめ細かな指導に取り組んでいる。英語科における学級編成は次の通りである。

- ・3年生2学級を学力が均等になるようそれぞれ2つの少人数学級に分割。リーダーを中心にしたグループ学習を中心に、必要に応じて習熟度別学習を取り入れる。担当教員は定期的に交代。(計4学級)
- ・2年生2学級を学級の枠を外し、学力が均等になるよう2学級に再編成。以下3年生に同じ。(計2学級)

イ ICTを活用した指導方法の工夫改善

英語教室に常設したパソコンとプロジェクタを使った単語、文型の導入や反復練習、問題演習を取り入れた。プレゼンテーションソフトを使った単語や文型の導入、反復練習は、フラッシュカードや黒板を使うより集中度や効率が高く、飽きずに行うことができる。

また音声パソコンから出すことで連続再生やスロー再生、止めた場所でのストップなどを容易に行うことができ、指導効果が大きい。



ウ リーダーを中心にした意図的グルーピングによるグループ活動やペア活動

均等に分けた少人数学級で、意図的グルーピングによる班編成を取り入れた。英語が得意な生徒とそうでない生徒をペアにしグループを作り、お互いに教え合ったり一緒に活動したりする場面を設ける。

授業では中間層以上のリーダーになる生徒の育成に努めている。活躍する場を与え、頻りに評価することで同質の学習集団の中で失われがちになっていた学ぶ喜びを再認識させた。そこから生まれる学習意欲が、同じグループ内の基礎学力未定着の生徒への働きかけとなり、温かい雰囲気の中で学び合える場面が生まれている。学び合う中で、考えを練り、それを自分の言葉で説明することで表現力の育成もめざした。スキット作りなどの英語表現活動でも、リーダーを中心に話し合いを進めることで、全体としてのレベルアップが期待できる。



全体で共通した課題に取り組む際には、教室の一角に「相談コーナー」を設け、分からない生徒を集めて教員が個別指導を行う。

②取組の検証

ア アンケート調査に見る生徒の意識

2学期末に行った「学習や学校生活に関するアンケート」の中で『あなたは授業の中で「分かった！」とうれしくなるような経験がどのくらいありますか?』という設問で、5つの選択肢を設けて、教科ごとに調査した。5段階の選択肢から回答させ結果を数値で処理した。下の表は少人数指導や習熟度別指導を行っている2、3年生の結果である。

肯定的な回答である4、5を答えた生徒の割合を見ると、数学75.5%、英語65.4%と他の教科に比べ『分かった!』と感じた生徒が多いことが分かる。少人数指導や習熟度別指導が、生徒の「分かる喜び」の体得に功を奏したと考えることができる。(単位は%)

	国語	社会	数学	理科	英語
5	1.8	7.3	30.0	10.9	14.5
4	32.7	36.4	45.5	44.5	50.9
3	27.3	27.3	11.8	20.0	24.5
2	26.4	18.2	6.4	14.5	8.2
1	10.9	10.0	5.5	9.1	0.9

イ 観点別評価の平均値の変化(英語科)

A、B、C3段階の観点別評価をそれぞれ5点、3点、1点に換算し、学年の平均点を学期ごとに比較してみた。

学年	1学期		2学期	
	4観点	表現	4観点	表現
3年	3.45	2.93	3.66	3.15
2年	3.45	2.91	3.52	3.03
全体	3.45	2.92	3.59	3.09

2、3年生ともに向上しており、少しずつではあるが学習の定着度が高まっていると期待できる。表現の観点で比較しても若干の上昇傾向にあり、リーダーを中心にしたグループでの活動が、英語科における表現力の育成にも良い影響を与えていると考えられる。

(2) 総合的な学習の時間における表現力育成の事例

①活動の概要

総合的な学習の時間のテーマである「ふるさと学習」と関連づけ、修学旅行の中で隠岐の島町観光PR活動を行った。5月から準備活動を始め、9月5日に大阪を中心に各グループで観光PR活動に取り組んだ。

「そのときだけ華やかな活動」で終わらず、生徒の意欲と郷土への愛着、社会の一員としての自覚が育つよう配慮した。そしてそこから「生きた表現力」が生まれることを期待してこの活動に取り組んだ。

ア 自分たちのポスターを作成

町の魅力を手作り観光ポスターに表現し、大阪の関係施設を回ってPR活動を行った。ポスターは、生徒が考える隠岐の魅力パソコンソフトを使って製作し、地元の印刷会社に協力を依頼して印刷した。当日、豊中市教育委員会や大阪市内の飲食店等を回り、ポスターの掲示を依頼した。旅行後も地元の観光ポスターとして役場、



隠岐空港をはじめ町内外で活用されることになり、生徒たちは地域の一員として貢献できたことに自信と誇りをもった。

イ 生徒が企画する隠岐の島の旅行プランを都会で紹介

郷土の良さを自分たちらしい言葉や方法で表現し、オリジナルの旅行プランを作成した。準備活動では自分たちの旅行プランの実現に向け、新しいアイデアを地域の観光関係者や事業所へ紹介や提案、交渉をして回った。

真剣に話を聞き、相談に応じてくれる町の人々の姿にふれ、意欲と自信を高めていった。そしてパソコンを使って旅行プランをパンフレットにまとめ、旅行当日は島根県大阪事務所、豊中市教育委員会、天神橋筋商店街などを訪れ、旅行プランを発表した。

ウ 大阪商店街での店頭PR活動

大阪の商店街での店頭PR活動の企画、運営を生徒たちが行った。



販売する特産品の選定、販売店との交渉からPR会場の準備まで生徒自らがを行い、どうしたらたくさんの人が来てくれるかその表現方法について話し合った。特産品の販売

の他に、郷土芸能でPRするグループや隠岐の写真や郷土料理のレシピを紹介するグループもあった。

②町や社会、大人とのかかわりの中で

「町の一員として何が出来るか」ということがこの活動のねらいの一つであった。準備活動で町の様々な所に出かけていき、自分たちの考えを話して協力を要請するうち、「町の人々が自分たちに応えてくれる」という実感をつかみ、生徒たちは徐々に意欲的になっていった。町長をはじめ、町の観光関係者を集めて行った中間発表会では、たくさんの専門家から評価やアドバイスをもらった。こうした「人とのかかわり合い」が自信を高め、意欲的に行動する生徒に変容したと考えられる。

そこから生まれる生徒の表現活動は「生の表現」であり、教員がチェックした原稿を覚えて話すような表現活動とは異なったものであった。こうした経験が表現力の育成に重要な役割を果たすと思われる。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

授業中に「分かる喜び」を感じる生徒は、数学・英語以外の教科においても増加し、逆に「全く分からない」と感じる生徒は減少の傾向にある。また、復習の時間やドリル的な反復練習の検証でも、定着度が低かった生徒を中心に、定期試験や単元テストの結果に伸びが見られた。各教科で指導方法の工夫改善を図ってきたことが、少しずつ効果を現し始めていると考えられる。

これらの学力向上のための取組が、様々な活動の指導と並行して行われたことに大きな意義がある。温かい人間関係、集団づくりという基盤の上で、智・徳・体のバランスの良い教育活動や指導が、相乗効果のように生徒の力を伸ばしてきた。

我々教員が生徒に対し、何をどこまで求めるか、高い目標と熱意をもって望めば、必ず生徒は力を伸ばすと確信できた。

(2) 課題

島根県学力調査の結果、本校の生徒には、学んだことをそのまま鵜呑みにし、理由や考え方を一緒に理解しようとする傾向があることが分かった。学んだことを咀嚼し、自分の言葉で表現できて初めて確かな学力として定着すると考える。

指導方法の工夫で「分かる喜び」を与えることはもはやそんなに難しいことではない。今後は、「分かった」で終わらず、学んだことを自分の言葉で説明でき、次への意欲や探求心へつなげていけるよう、さらに指導方法の工夫改善を図っていきたいと考えている。

学校名：奥出雲町立横田中学校

所在地：仁多郡奥出雲町稲原2050番地3

学校規模：9学級 227名

(学力向上パイオニアスクール事業)

1 研究の概要

(1) 研究主題

「自ら学び、考え、たくましく生きる生徒の育成」
～自尊感情の育成を基盤とした教育活動の充実～

(2) 研究のねらい

自分の考えをまとめ、発表する活動を取り入れ、基礎・基本の徹底と表現力や思考力の育成に重点を置いた取組を行う。

(3) 取組の経緯と生徒の実態

本校は平成16・17年文部科学省『児童生徒の心に響く道徳教育推進事業』の指定を受け、「自分のよさに気づき、互いを大切にしよう生徒の育成（～生徒相互の交流を通じた自尊感情の育成～）」を道徳教育の研究主題として掲げ取り組んだ。道徳の時間の指導に限らず各教科をはじめとするそれぞれの教育活動の中で高める視点を明確化し、具体的な取組の方法を推進したことは、教育活動全体の中で生徒の道徳性を育てようとする意識の高まりにつながった。

また、平成17年度から奥出雲町は『キャリア・スタート・ウィーク推進地域事業』の指定を受け、5日間の職場体験学習を実施した。キャリア教育学習プログラムを作成し、各活動にはどのような能力・態度の形成を図ろうとするものがあるのかできるだけ明確にしておくことは、学習を進める上で有効であった。

生徒が自分自身に対して自信や自尊感情を持つことは、学ぶ意欲を育て、体験を通して得られるコミュニケーション能力の必要性や自己の将来を見通した課題意識をもつことで、学ぶ目的や意味をもつことにつながる。

本校は、これらの実践の流れを学力向上策の基本方針に据えながら継続、発展させていくこととした。

また、学力調査の結果分析から、全学年で「学習内容を身につける力」では、「新しく習ったことは、何度も繰り返し練習している。」「授業で習ったことはその日のうちに復習している。」「興味を持ったことを自分から進んで学習している。」が低かった。また、自分の考えを筋道を立てて表現することが苦手であるという結果から、研究のねらいに向けての課題も見えてきた。

2 研究の実際

横田中3プロジェクト

(1) <道徳教育プロジェクト>

- ①道徳教育全体計画、道徳年間指導計画の作成
- ②オープンスクールの実施
- ③評価カード、個人カードの活用
- ④道徳だよりの発行

(2) <キャリア教育プロジェクト>

- ①キャリア教育全体計画、学習プログラムの作成
- ②5日間の職場体験学習の実施

(3) <学力向上プロジェクト>

学力向上パイオニアスクール事業の推進

A：表現力や思考力の育成に重点を置き、学習意欲の向上と自尊感情の育成を大切に学習指導の工夫と改善

①校内授業研究への取組（6回実施予定）

- ア 自分の考えや思いをわかりやすくまとめて書き、発表する活動を取り入れた学習活動の工夫（ワークシートの活用）

【例】○1年国語

話の内容を聞き取り、整理してまとめ、発表する。

○1年英語

自分のことについて書き、それを友達に話す。
友達の情報を得たら、別の友達に紹介する。

○2年社会

資料や図から読み取れることをまとめ、発表する。

- イ 自尊感情に視点を置いた支援の仕方を考えていく。達成感や自信を育てる授業展開の工夫。

ウ 各教科で、授業評価を導入していく。

- エ 小、中、高との連携（小算道、中数英、高数英の授業への参加）

②少人数指導、TT等によるわかる授業の展開

- ア 教科や単元・内容により、少人数授業とTT授業を組み合わせて実施している。

③選択授業の工夫（補充的内容と発展的内容）

B：基礎基本の徹底のための学習習慣の定着

- ④「生活の記録」への学習時間や内容の記入
- ⑤自主学習ノートへの教師のチェック
- ⑥放課後の学習会の実施
- ⑦自主学習の環境整備（図書室やコンピュータ室）
- ⑧外部協力者の導入

3 研究の成果

A：「表現力や思考力の育成に重点を置き、学習意欲の向上と自尊 心の育成を大切に学習指導の工夫と改善」について

(1) 校内授業研究の取組からの成果

① 学力調査等では見られない生徒の実態把握ができた。

授業者や参加教員の観察および授業評価シートから次のような実態が明らかになった。

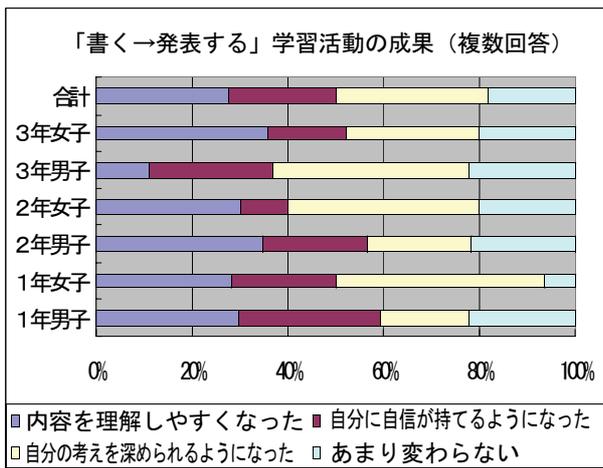
ア 書く活動に対して、話し言葉が多く、箇条書きでの要点整理が苦手である。

イ 学習中における、言葉のやり取り等生徒同士の交流の実態

ウ 指導者が与えた課題に真面目に取り組むが、自ら疑問に思ったり、そのことを追究したりしようとする姿勢に乏しい。

エ 学習内容以外にも生徒がもつ知識は多いが、断片的である。

また、全校生徒に、「自分の考えや思いをわかりやすくまとめて書き、発表する活動に取り組んだ成果」について、アンケートを行った。



その結果、上記のグラフのように、多くの生徒が「書く→発表する」という活動の有効性を実感していることがわかり、書く活動の取り入れ方、書く指導の位置付けの必要性を感じた。

② 他教科の授業を見ることにより、授業方法の広がりが見られた。

ア 「〇〇〇の質問が役に立った」、「〇〇〇の発言で、〇〇〇に気付いた」などと実感する場面を教師が拾い出し、また、生徒同士が感じ合う場面づくりが必要である。そのためにも、改めて集団づくりの大切さが実感できた。

イ つまづきの経験を学習の中で取り上げ、乗り越えさせていく方法の必要性を感じた。

ウ 図や写真の資料、及びグラフ資料の処理の仕方についての問いかけの工夫（要素の焦点化）の必要性を感じた。

③ 小、中、高で連携して学習指導を進めていくための情報交換の場をもつことができた。

ア それぞれ入学時に教科に関するガイダンスを大切にしている。
(中学校、高校)

イ 各校種での単元、領域に対する取組と生徒の実態が理解できた。(算数、数学…分数)

ウ 理解力も必要であるが、学習意欲の低下が気になる。

エ 小学校での英語活動の様子が理解できた。

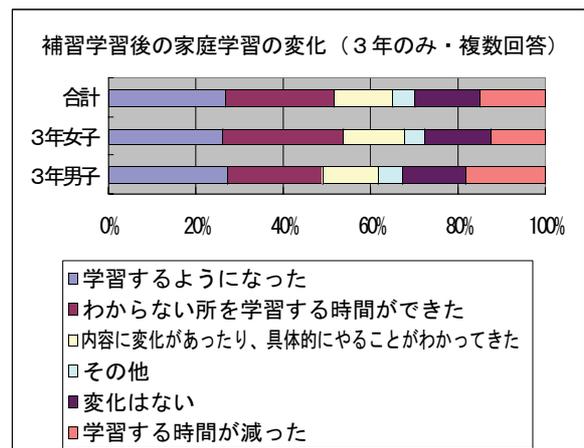
オ 宿題の出し方と児童生徒の取組について知ることができた。
(小学校、中学校)

カ 小・中学校と高校との学力観について話し合うことができた。
(高校)

B：「基礎・基本の徹底のための学習習慣の定着」について

(2) 放課後の学習会の実施からの成果

① 本校生徒の7割はバス通学である。放課後、バスの時間待ち時間を利用して、3年生（93名）を対象に放課後学習会を2学期から始めた。5時間授業の時はプリント課題で質問形式を取り、6時間授業の時は自主学習の形態を取っている。これに取り組み始めて行ったアンケート調査の結果は、次の通りであった。



4 今後の課題

- (1) コミュニケーション活動を様々な場面で増やし、お互いの意見が認められる集団づくりを行う。
- (2) 自信がない生徒が安心して発表できる雰囲気づくりと発表方法の工夫について指導する。
- (3) 図や写真の資料、及びグラフ資料を処理したり、なぜ間違えたのか、なぜそうなるのか考える機会を増やしたりして、自分の考えをまとめる力をつけていく。
- (4) 読む・書く・話す力をバランスよく指導していく。
- (5) 各教科で授業評価を行い生徒の実態を分析し活用していく。
- (6) 小、中、高の連携をさらに深めていく。特に、中高の連携については、現在、英語と数学が中心であるので、他の教科にも広げ、また、回数も増やしていきたい。

学校名：益田市立益田東中学校

所在地：益田市東町14-48

HP: <http://www.iwami.or.jp/higasiyh/index.htm>

学校規模：9学級 243名

(確かな学力育成のための実践研究事業益田小学校と連携)

1 研究の概要

(1) 研究主題

学び合い、学び続ける児童生徒の育成
(益田小学校と共通した研究主題)
～互いのよさを認め合い、学ぶ喜びを
実感できる生徒の育成をめざして～

(2) 研究仮説

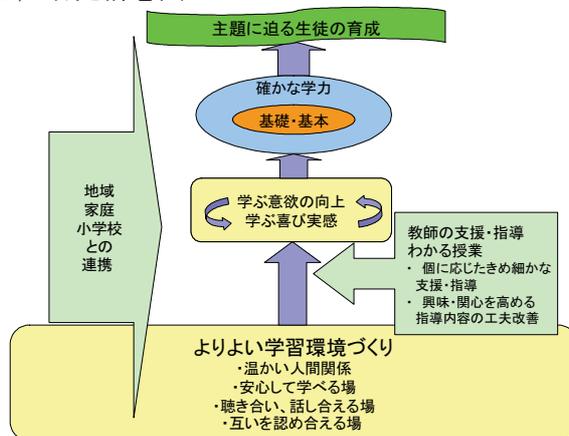
- ① 学習の過程で生徒同士が意見交換をしたり、互いに学び合える学習活動を効果的に取り入れたりすれば、生徒は多様な価値観や感じ方にふれ、他の学びのよさを認めながら自らの学びを深めていこうとするであろう。
- ② 個に応じたきめ細かな指導や生徒の知的好奇心を喚起する素材の教材化など、わかる授業をめざして指導方法や指導内容を工夫改善すれば生徒は学ぶ喜びを実感し進んで学び続けようとするであろう。
- ③ 学校組織として「確かな学力」育成に取り組めるよう研究組織を見直し、益田小学校と連携して共通した研究専門部を運営していけば、教員の同僚性や指導力の向上、児童生徒への義務教育9年間を見通した支援指導が可能となり、本事業をさらに円滑に進めていくことができるであろう。

(3) 研究内容

- ① 互いのよさを認め合い、仲間とのかかわりの中で学び合える授業をめざし、授業改革を行う。
 - ペア、グループ学習活動を効果的に取り入れた授業展開を行う。
- ② 生徒が「学ぶことが楽しい」と実感できるような、わかる授業を工夫改善する。
 - 個に応じたきめ細かな支援・指導を推進する。
 - 生徒の興味・関心を高める指導内容を工夫改善する。
- ③ 各研究専門部の活動を推進する。

- 3つの研究専門部(授業研究部, 調査広報部, 児童生徒支援部)を益田小学校と共同で設置するなどして組織を整える。
- 各部の役割分担を明確化して、全教職員が協力して研究実践が進められるようにした。

(4) 研究構想図



(5) 検証計画

3つの研究仮説に関して、次のような検証を行う。

(仮説①に関して)

- ・授業中の観察, レポート, ワークシート
作品分析等(随時)
- ・授業に関するアンケート(学期末)

(仮説②に関して)

- ・授業に関するアンケート(学期末)
- 学力検査・学習適応性検査(2月)
- ・自学ノートについてのアンケート(12月)

(仮説③に関して)

- ・研究授業ビデオ分析, 研究協議(研究授業後)
- ・学習や生活にかかわるアンケート(益田小学校と共同で実施)(1学期, 3学期)
- ・保護者からの学校評価(学期末)

2 研究の実際

(1) 授業の改革

- ① 外部講師(佐藤雅彰前富士市立岳陽中学校長)を招聘し、授業研修会を計画的に行なった。
- ② 本校がめざす授業と教師の姿を全教職員で確認した。



指導助言

ア 従来の教師主導の授業から生徒主体の学びへの転換を図ること。

イ 仲間とのかかわりの中で学び合える授業づくりをめざすこと。

ウ お互いに授業を公開し合い、学び合える教師集団づくりを行うこと。

③ 全教員で一人一授業を公開し、授業力を高めるようにした。また、授業公開については次の点を共通理解して実践した。

ア 指導案の形式にはこだわらないこと。

イ 授業中は生徒の学びが成立していたかどうかを大切にすること。（生徒の表情がわかるよう、教卓側からビデオ撮影）

ウ 事後の研究協議では教科の枠を超えて誰もが一回は発言すること。

エ 指導方法の良し悪しや教材解釈など、教師の視点に立った協議に固執せず、生徒の表情、動き等、具体的な姿に基づいて話し合うこと。（協議中、必要に応じてビデオを視聴）

オ 教職経験年数を問わず、誰もが「公開授業を通して何かを学ぼう」という気持ちを持ち授業、協議に参加すること。



学び合いの授業



研究協議の様子

(2) 仲間とのかかわりの中で学び合える授業

(ペア、グループ学習活動の取り入れ)

～英語科の実践例～

① Speaking Plus で繰り返し取り扱われる題材（電話の会話、道案内、食卓で等）では、ペア、グループで協力し独自のスキットを作る課題を設定し、発展的な学習につなげていくように工夫した。

② Let's Read等、長文を扱う単元、各UnitのReading for Communicationのパートでは、グループで長文を訳していく時間を設定した。英文を楽しむ、概要を把握することを目的とし、わからない箇所があっても読み進めていくよう指導した。



3 研究の成果と課題

(1) 授業改革について

研究協議の時に生徒がどのように学んでいたかという視点で話し合うことは、教師全体の生徒を見る目の向上につながった。さらに、自分の教科と他の教科での生徒の様子を比べることで、「なぜAさんはこの授業では、意見交換ができているのか」「授業中のBさんの笑顔を初めて見た」等、他教科での異なる生徒の学びの姿を発見し、それを各自の授業の見直しへとつなげていくことができた。

(2) 学び合える授業の実践について

- ① 場面に応じた表現活動をペア、グループで実施することは、自らの気持ちや考えを英語で伝えると同時に、他の生徒の英語表現を聞く活動にもつながっていった。そのため、生徒の表現の幅が広がり、英語運用能力が高まる等の成果が上がってきている。
- ② 長文読解では、互いに単語の意味を確認し合ったり、文の解釈の仕方を論議してみたり等、グループで協力して訳を進めることができるようになった。
- ③ 英語科で行ったアンケートにはペア、グループ学習活動について「楽しくできる」「自分たちで調べるから頭によく入る」「一人ではできないこともみんなでやるとできる」など、肯定的な意見が見られた。
- ④ 昨年度から積極的にペア、グループ学習活動を取り入れている3年生は、学力検査CRT（昨年度3学期実施）、島根県学力調査（今年度1学期実施）共に英語の平均到達率が受験者平均を上回る結果となった。
- ⑤ グループ学習活動での課題に興味を示さない生徒や他とかかわり合うことが苦手な生徒もおり、今後は、そのような生徒への効果的な支援のあり方が課題である。
- ⑥ ペア、グループ学習活動の取り入れ状況は教科によって異なり、全教科で毎時間実施というところまでにはいたっていない。教科によっては取り入れにくいと感じている担当者もおり、共通理解を深めていく必要がある。

未来を切り開く島根の子どもをめざして
－「しまね学力向上プロジェクト」実践事例集－

<発行> 島根県教育委員会

〒690-8502

松江市殿町1番地

TEL 0852-22-5421

Eメール gimu@pref.shimane.lg.jp